

---

# 緑のレジスタンス

桂まゆ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緑のレジスタンス

### 【Nコード】

N9245F

### 【作者名】

桂まゆ

### 【あらすじ】

「あなたの子供達をいつか守る為に強くなる」自分の代わりに死んでいった人たち、自分を庇って死んでいった人たちに、マーシイはそう誓う。運命を背負った「子供達」が出会い、集う。いつか力を身につけ、使命を果たす為に。

## プロローグ 惜別の鐘（前書き）

長くなりそうな予感がしています。  
しかも遅筆です。

さらに、プロローグでいきなり人が死んでいます。  
こんな話ですが、気長におつき合い下さいませ。

## プロローグ 惜別の鐘

少年は、うなだれ、涙を流していた。

彼の母親は息子の肩に手をかけ、厳しい面差しで佇んでいた。待っているように見えた。息子の、次の言葉を。

二人の前には、小さな肉塊。数時間前までは生きていた、愛らしい笑みさえ浮かべていた、幼い子供の遺体。

こぶしを堅く握り締め、少年はそれを凝視している。

「仕方がないと、おっしゃるのですか？」

やがて、少年は掠れた声を吐き出した。

「私が生き延びて、妹は死んだ。それが、仕方がないことだと……」「そうです。どんな犠牲を払っても、あなたは生き延びなければならぬのです。いつか、本当の力が身につくまで」

母親の返事に、少年が驚愕することはなかった。

「万が一の時は、私を犠牲にしても生き延びなさい」母は、事あるごとにそう言って彼を諭していたから。

「でも私は 守ってやるって言ったのに。リーンは、まだ洗礼さえも済んでいなかった。何の力もなかったんだ！ それなのに……」「アデイスラーン！」

母の白い手が、少年の頬を打つ。

「自分を守ることも出来ないあなたに、どうして他の誰かを救うことが出来るのですか。先ず、自分の身を守る術を覚えなさい。」

フィルサーナ子爵家の嫡子として「

母の手は、そして声は震えており、少年は初めて母親が泣いている事を知った。

妹を リーンを失い、一番悲しいのは母の方だと。そう気づくとたまたまなくなり、そっと母親の肩に手を回す。

「ごめんなさい、母上」

呟く。

母親の喉元から嗚咽が漏れた。

力があれば。

もうこれ以上、誰も失わないように。

少年は、そう願った。

そして彼らからあまり離れていない場所で。

ファランシアは、瀕死の重傷を負った母親にすがりつき、ネイルはその傍らに膝をついて、彼女の末期の言葉を聞いていた。

「忘れないで、可愛いファランシア。正義は決して無力ではないのよ」

「お母さま。魔法が使えません。神の声が……」

普段は辟易するほど饒舌な少女は、上手に言葉を紡ぎ出すことが出来ずにいた。

細い指が、小さな金色の頭を撫ぜる。

「忘れないで。力は、確かにある。あなた達の中に……」

母の胸に泣き崩れる、ファランシア。  
セティとユート。幼い二人を両手で抱き締め、マーシイはただそれらの光景を見つめていた。

どこか、遠い光景のように感じられる。夢であると思いたい。しかしこれは、紛れもない現実だった。

忘れては、ならない。生き残った自分たちは、この光景を決して忘れてはならない。

マーシイはそう思った。

「あなたは、あなたたちは、生き残らなければならないのです。誰の死をも乗り越えて。いつか、この世界を救う為に」

エリユーゼイア。いつも優しく彼らを抱きしめてくれていた美しい女性。

その命がこぼれてゆく。

「忘れないで。わたくしの大切な子供たち。希望は、あなた達の中に……」

マーシイの服を掴んだユートの手は震えていた。宙を睨むセティ

が、掠れた声で悪態をついていた。

二人を抱き締める手に、力が籠もった。

自分たちを守るために死んでいった人たち。自分たちの代わりに、死んでいった人たち。本当は、守りたかった。自分達を庇って死んで行った人たち。

もう、二度と繰り返さない。そう誓えない自分の、ふがいなさ。

きっと、この後幾度でも、このようなことがあるのだろう。自分たちはまだ幼すぎる。闇に対抗するにはあまりにも無力で、それでもいつか、闇と戦わなければならない存在だから。世界を勝利に導く、その使命を持って生まれたのだから。

いつか、本当の力を手に入れるまで、一体何人の屍を乗り越えて行かなければならないのだろう。

マーシイもまた、泣いていた。

悔しさ、やるせなさ、もどかしさ。

十五歳の少女の心に、それは深く刻み付けられた。

この痛みを忘れてはならない。忘れない限り、強くなれる。

その日、数奇な運命の果てに巡り会った子供達は同じ色の涙を流した。

## 第一章 子供達 1

「許せせんわ！」

叫んだのは、先日十一歳の誕生日を迎えたばかりの少女だった。叫ぶと同時に、マントのフードを邪魔そうに払いのける。

夕暮れの残照に、金の滝がきらめいた。

癖のない、黄金色の髪。背中の中ばで切りそろえられた髪は、彼女が首を振るたびにさらさらと流れ、広がる。きめの細かい肌は透けるように白いが、それは病的な色ではない。

こぼれるような若草色の瞳には知性の輝きがあり、整った鼻梁に薄紅の唇。神の寵愛を受けた美の結晶がそこにあった。

しかし、今。無造作にかきあげられた豊かな髪は乱れ、透明感のある白い頬は薔薇色に紅潮し、瞳には翠の炎が燃えている。

憤りが、彼女を包んでいるのだ。それも尋常のものではない。

ユートは知っていた。今の彼女を、自分は止められない。

フランシア。小さな淑女。誇り高く、潔癖な少女。可憐な美貌と激しい気性を兼ね備えた者。これだけの憤りに支配された彼女に、自分の言葉など役に立つわけがない。

物心ついた頃から傍らにいたのだ。それは解っていた。解ってはいたが、これから引き起こされるであろう騒動が極力小さくなる努力だけはしなければならぬ。

損な役回りである。

「でもね、フランシア」

ユートの言葉を、案の定フランシアは聞いてはいなかった。

「正義と愛の守護者、聖女アトレイヌとラ・ナ・レーンの巫女として、放つてはいただけません。止めないで二人共。一発ガツンとやってさしあげなければ、わたくしの気が収まりませんわ」

正確に言えば、一言ぬけている。巫女の後続く「見習い」という言葉が。しかし、そんな突っ込みを入れる余裕がある人間は、今

はない。

ファランシア。

生まれた時から、彼女は慈愛の聖女アトレーヌの巫女だった。多分、そうなのだろう。

聖女アトレーヌの再来と呼ばれた彼女の母親に生き写しなのは、端麗な美貌だけではない。言い出したら聞かない頑固さと怖いもの知らずの性格も、母親譲りだ。

誰よりも美しく、誰よりもわがままで、そして誰からも愛されていた。頑固なまでに一途な人。

『わたくしなど、まだまだお母様の足下にも及びませんわ』。母親と比べられるたびに、ファランシアはそう言って笑っていた。その、柔らかな手に抱かれながら。

その女性は、既にいない。二度と会うことは、出来ない。

「そうだね、シア。でも……」  
さて、どう言葉を繋げるべきか。ユートは必死になって考えを巡らせる。

ファランシアと同じく、十一歳。あと二月もすれば十二歳になる。癖のある柔らかな金茶色の髪を頭の後ろでひとまとめにした少年。琥珀の瞳も柔らかな面差も、どこか気弱な印象を与える。いや、実際この三人の中では気が弱い部類だ。それに生来の生真面目さが加わって、いつも損ばかりしている少年だ。

少年の上着の透き間から、金色の毛玉が転がった。それは彼の腕を上って、肩の上で止まる。

鼠が栗鼠か。栗鼠に似ている。ふさふさとした金色の毛並みを持つ、栗鼠。普通の栗鼠と違うのはその毛並みの色と、尻尾が兔のように短いことか。

栗鼠に勇気づけられるように、ユートは再び口を開いた。

「でも僕らが騒ぎを起こしたら、マーシイが困るだろ？」

取り敢えず、一番効果のありそうな名前を引き合いに出す。

マーシイは、三人の姉貴分。十年來の子守役である。

ファランシアの動きが、止まった。振り返った若草色の瞳には、困惑の色がある。

ユートが安堵の息をついた、瞬間。

「ばあつかやるうつ」

今まで沈黙していた　沈黙しつつ、いつの間にかマントを脱ぎ捨て身軽になっていた、今ひとりの少年が叫んだ。

この中では最年長。ユートの従兄で、彼よりも更に八カ月上の十二歳。堅い黒髪を肩まで延ばしてやはり後ろで束ねている。黒髪に黒い瞳は、彼の生まれ故郷であるレイスタでは標準的だ　もつとも、その村は既に存在しない　が、その浅黒い肌は南の沿海あたりの血を引いているのだらうと、思わせる。

セト・ナティ。名の付け方からして、沿海州独特のものだった。あちらでは、両親がそれぞれ名を与える。セトは父が、ナティは母が付けた名前だ。愛称はセティ。彼自身は本名よりもこの愛称の方が気に入っている。

少年達の両親は、既にいない。彼らをここまで導いて来たのは、ひとりの男と姉貴分の少女。

「マーシイが、こんなの見過ごしておくわけねえだろっ！」

言うが早いか、セティは飛び出した。そして。

「下がりなさい、その下郎！」

負けじと声を張り上げる、ファランシア。ユートは頭を抱えた。

事の起こりは、マーシイとアディスラーンの二人が、彼らを置いて日用品の買い出しにでかけたことだ。

マーシイは、三人の姉貴分。セティとユートにとっては、従姉弟の関係にある。つまり、マーシイの父親と、セティの母親、ユートの父親、そして現在の彼らの後見人であるネイルは兄弟だった。

交易の中心地コルノスと大陸最古の国シルノアとの国境に位置するレイスタの渓谷にある村が、彼らの生まれた土地だ。『識者』ネイルと巫女ファランシアに守られてそこを旅立ったのはファランシ

アがまだ赤ん坊だった頃だった。彼らがファランシアの父方の故郷、コルノスはフィルサーナ伯爵領ラスタにたどり着いたのが十日前。その折りに、一つの喜びと二つの悲劇があった。

アデイスラーン・フィルサーナ。ラスタの前領主、ライアスリート・フィルサーナ子爵の長子で、ファランシアの従兄に当たる十五歳の少年。五年前、父の死をきっかけにラスタを出たアデイスラーンと、十年近く前から放浪を続けている、子供達。彼らは長い旅と行き違いの果てに巡り会った。

同じ『しるし』を持つ者同士の出会いが果たされた時、彼らは二つのかけがえのない命を失ったのだ。

アデイスラーンの妹、リーン。そしてファランシアの母、長い旅を共にしてきた美しき巫女、エリユーゼイアを。

しかし、二人の死は、決して始まりではなかった。

この血塗られた時代の幕開けは、十三年前に逆上る。

邪神降臨。

五百年前に唯一神ラ・ナ・レーンとラ・ナ・レーンの賢者、そして精霊たちによって封じられた邪神ミゲルが、再びこの世界を蹂躪したのである。

その時、神話に語られた『十三の勇者』 邪神を滅ぼす力を持ったラ・ナ・レーンの子供達は、生まれてもいなかった。少なくとも、二人は。

邪神を一時的にでも封じたのは、精霊王フィルサーナとその子孫の精霊使い達。

『魔道の塔』の魔道師。

賢者に導かれたラ・ナ・レーンの神官。

そして、人間の戦士たちだった。セト・ナティの両親を含むレイスタの戦士も、そこに名を連ねている。

五百年前と同じように、人間と精霊が手を携え、邪神を眠りにつかせた。

それだけだ。

おぞましき邪神の使徒や妖魔を相手に、彼らは死力を尽くして戦った。邪神ミゲルを前に、大勢の戦士が倒れた。

ようやくと邪神が眠りについた時、強固な封印を施せる者は、既に生きていなかった。

今は余命いくばくもない精霊王フィルサーナが、眠れる邪神を地中深くに封じている。彼の命が尽きる時、邪神は再び蘇るのだ。

それは十年後か？ それとも明日か？

この、神話時代から数えて三度目の『聖戦』の結果は、地上に生きる人間たちにとって最も苛酷なものとなった。

邪神は眠りについたが、その使徒は無数に生き永らえた。二年に渡る『聖戦』。さらに十年余を経る間に、魔物たちは往々に力を取り戻しつつある。

そして人間には、そんな彼らに対抗する手段は残されてはいなかった。

魔道師を統括し、絶大の権威を誇った『魔道の塔』は形骸化し、神に選ばれ神の意志を伝える『賢者』は真つ先に殺された。神殿に足を運ぶ者は途絶え、多くの街は門を閉ざした。

人々は、知らなかったのだ。神の言葉を伝える者は、既に存在しなかったから。

『聖戦』のただ中で生まれ、あるいは目覚めた『しるし』を持つ者。ラ・ナ・レーンの子供たちの存在を。

邪神の使徒たちはそれに気づいている。邪神を滅ぼす存在が、世に現れたことを知っている。そして執拗につけ狙い、子供を狩る。黒い甲冑を纏った、肉体のない悪魔の姿で。

多くの罪もない子供達はその刃にかかったが、その中に神の勇者はいなかった。『しるし』を持つ者達は、あるいは偶然に助けられ、またあるいは彼らを守る者との命と引き換えに、甲冑の悪魔から逃げのびた。

邪神を滅ぼす筈の者は、未だ邪神の使徒を退ける力すら持っていなかったから。

堂々巡りを重ねて、星辰は巡り続ける。かくして、彼らは出会った。十年を経て、同じ『しるし』を持つ者たちは巡り会った。このフィルサーナ子爵領ラストで。

ラストは、静かな街だった。首都サイラスから馬で約三日。緑の深い街だった。

新たな精霊王　邪神を封じる為に自ら精霊界を出たフィルサーナに代わり、肉体を捨てて精霊界に入った彼の子孫　の加護を受ける街。

今まで通って来たどんな所よりも、平和な街に見えた。

その平和な街の外れの森に閉じ込められて十日もたてば、幼い子供達の好奇心がうずき出す頃だ。彼らにとって、マーシィらの外出はぬけがけに等しい。

治癒魔法の甲斐もなく最愛の母を目前で亡くしたフランシアを、少しでも元氣付けたい気持ちもあった。

内緒で二人を追いかけようと言い出したセティに、金髪の少女はあの日以来の笑顔を見せた。

「一人で行かせると、ろくなことをしませんものね。セティは」という言葉は、そのまま名前だけを変えて差し戻したいような内容だったが。

ともあれその笑顔にほだされ、ユートも承諾した。

後見人であるネイルの目を盗んで、街に入った。マーシィらを見失ってからも三人の冒険心は衰えず、探検気分で路地に入る。

運が、悪かった。

たまたま通りかかった小路で、歩くことすらままならぬような風体の老人と年端も行かぬ少年の二人連れ　精霊の加護を頼ってラストを目指した難民だ　が、革鎧に身を固めた三人組の男達に難癖をつけられ、揚げ句に殴る蹴るの暴行にまで発展した。それを目にして、母を亡くした悲しみを、母のような立派な巫女になることで癒そうとしたフランシアに、黙認できる筈がない。

かくして、この展開である。

フランシアの声に、男たちは手を止め、周囲を見回す。

頭頂はげ、左目に趣味の悪い眼帯、曲がった口に茶色いすきつ歯  
いずれも、ろくな人相ではない。

「誰だあ？ ふざけたことを言いやがった奴はあつ！」

頭の頂点がはげ上がった男が、喚いた。ちらりとフランシアの  
姿を視界の片隅に映し、行き過ぎかけた視線を戻して、まじまじと  
凝視する。

「出て来いよ、おらあ」

喚く眼帯の男の肩をつついて促すと、眼帯の男もまたフランシ  
アに値踏みをするような視線を向けた。

こんな時に際立った美貌を隠す為のマントのだが、フードを払  
いのけてしまつては意味がない。

「餓鬼じゃねえか」

仲間の視線を追つたすきつ歯の声は、呟きにしては大きすぎた。

若草色の瞳が、燃える。

「弱い人に群がるけだものに、そんなこと言われたくありませんわ  
ね」

凜然と告げる、澄んだ声。男たちは、先刻自分たちを罵倒した者  
の正体を知つた。

しばし唾然と目を見開き、互いに目を見交わして、やがて爆笑す  
る。下卑びた笑いだ。フランシアの勘に触るには十分な。

「お嬢ちゃんだったのかい、さっきのは」

「大人を、からかつちゃあいけないなあ。おイタがひどいと、お仕  
置きするよ」

「ご、ごめんなさい」

謝つたのは、勿論フランシアではない。セティを押しつけたユ  
ートだった。

「何、謝つてんだよ！ 謝るのは、あいつらの方だろ？」

そして勿論、押しのけられた少年が黙っている筈はない。

「落ち着いてよ、セティ。こんな所で騒ぎを起こさないで」

「騒ぎはもう、起こってるじゃねえか。俺たちがおとなしくしていた目の前で」

「そうですね。それを黙って見ているなんて、男のすることではありませんか」

それは解っている。ユートだって、気持ちは二人と同じだ。でも。

駄目なのだ。軽はずみな行動はしてはならない。させてはならない。この二人は絶望に満たされた世界に、いつか希望を与える存在なのだから。

もしも、二人に事がある時は、何があっても自分が守ろう。ずっと前からそう思っている。

エリユーゼイアが命をかけて彼らを守ったように。

彼の母親が、彼らを逃がす為に命を投げ出したように。

ユートの迷いは一瞬のことだった。決断を下したのは、セティ。

「お前は、下がってる！ あんな奴ら、俺だけで十分だ」

「人の後ろに隠れているような人間に、神は力など貸してくれませんわよ、ユート」

続くフアランシアの言葉に、ユートは迷いを断ち切った。肩の栗鼠を傍らに置き、駆け出す。倒れ伏した老人の側に。そこで成り行きを楽しんでいる、頭頂はげの男の元へ。

## 第一章 子供達 2

「これで全部かい？」

穀物の粉と干した肉、野菜、そして家で待つ子供達へのお土産の飴。雑貨屋の老婆から差し出された日用品を受け取るうと手を伸ばし、マーシイは気づいた。

訝しむように自分を見る、老婆の目付き。

仕方がないのでにっこりと微笑んでみせると、老婆は得たりと手を打った。

「やつぱり。あんた女の子だね？」

腰までのマントと丈の長いチュニツクは、体の線を隠してくれる。細い脚にはぴったりとしたパンツ。その上から膝下を覆っているのは、革のブーツだ。マントの下には、愛用の小剣が覗いている。地味な色合いの中で唯一彩りを持つのは、額に巻いた赤い布だけ。飾り気も何もない。

艶やかな黒髪は、首の付け根で切り揃えられ、それが逆に、細い首の白さを際立たせていることには、本人は気づいていない。

いで立ちこそは少年のものだが、マーシイはれっきとした女の子だ。

黒髪に縁取られた白い肌、瞳の色も、黒。半年前に十五歳になっただばかりの瑞々しいおもてや、ちよつとした仕草はあくまで少女のものだった。

「旅をしていると、この格好の方が都合がいいの」

愛想笑いを浮かべつつ、応じる。老婆はそれで納得したようだ。

「それにしても、思い切りよく切っちゃったもんだねえ。きれいな髪なのに」

そう、母親譲りの漆黒の髪。それがマーシイの自慢だったこともあった。それを惜しげもなく切り捨てたのは、半年前。十五歳の誕生日を迎えた、その日だ。

故郷の村では成人として認められる歳。マーシイは髪を切った。「まあ、旅の最中なら仕方ないかも知れないねえ。でも、男の格好をしているからって油断は禁物だよ」

老婆の言葉はまだまだ続く。

十年以上前に死んでしまった娘の話、五年前に殺された孫の話。

「なんで私だけが生き残っちゃまったのかねえ。こんな老いぼれが浅ましく生き長らえなきゃいけないのかって、その時は思ったさ」

「おばさんが居なければ今日、私、ここで買い物出来なかつたわ」  
そうマーシイが告げると老婆は笑う。

そうしている間に何となく、心が安らいでいる事をマーシイは自覚した。

十年にわたる旅の間、こんな風に他人に興味を示す者は稀だった。過去と未来の運命を嘆きながら今日という日を生きている者は、流れるに気を止める余裕などない。

自分たちに興味を持つ者は、他人を食い物にしている輩だと思え。マーシイはそう教わった。

それでもたまには、幼い子供達の旅を不憫に思ってくれる人もいた。当たり前な平和だった頃を、覚えていてる人がいた。

長い旅は、十五歳の少女にそれらの人種を見分ける術を与えていた。

少なくともこの老婆は、悪い人間には見えない。人の良い、世間話が好きで普通のおばあさんのようだ。

この街は平和なのだろう。

マーシイはそう思った。

今まで通って来た街は、明日に訪れるかも知れない恐怖に心を凍てつかせた者で溢れていた。世界に希望が見い出せず、嘆き続けるだけの人間が。

でもこの街は違う。一度は邪神に蹂躪されながらも、立ち直った町。精霊の加護を受ける町。

ここは、他に比べると随分平和なのだ。

「マーシイ」

背後から声がかけられた。振り返ると、アディスラインが少し厳しい目でこちらを見ている。

アディスラインは、このラストの前領主であるライアスリート・フィルサーナ子爵の嫡男で、時代が時代であれば「若君」と呼ばれている筈の存在だ。

もつとも彼は、五年前に両親と共に死んだことになっている。フィルサーナ一族 精霊王フィルサーナの血を引く者特有の髪を今は布を巻いて隠しているのもその為だ。

深紅の髪は何故か毛先に近づくにつれ色が抜けていくようだ。深紅から紅茶色へやがては金色へ、綺麗な濃淡を描きながら毛先は水色を帯びた銀色に。自然にはあり得ない不思議な色合いは、精霊の加護を受ける者の証しだと聞いた。

瞳の色は、深い藍。マーシイより数ヶ月遅れの同い年だが、背のほうはマーシイよりも頭ひとつ分高い。

「あ、そうね。兄さん」

おしゃべりが過ぎることに気づき、慌ててマーシイは銅貨を取り出す。

「もう帰らなきゃ。父さんたちが待っているの」

「そうかい。じゃあ早くお行き。日が暮れてしまわなくても、決して安全じゃないんだからね」

老婆の声に、表情に、沈痛な色が滲んだ。

「え？ だって、この町には甲冑の悪魔は来ないんでしょ？」

「ああ。あいつらは来ない。ここは精霊に守られているからね。でも、悪い奴らはどこにでもいるもんさ」

「腐っているんだ。内側から」

再び、アディスラインが背後から口を挟む。その痛烈な一言に、マーシイはぎょっとして振り返った。

「精霊の結界は、妖魔を寄せ付けない。だが、腐りきった人間には効果がない」

アデイスラーンの声は乾いている。そうだった。その人間に、彼の父親は殺されたのだ。五年前に。

現在の、ラストの施政者に。

「帰ろう。マーシィ」

帰ってきたわけではない。市門を越えた時、彼はそう呟いた。

まだ、帰ったわけではない。いつか本当の力を手に入れた時こそ、私はこの街に帰るのだと。

今は、ただ立ち寄っただけ。妹を亡くした傷を癒す為に。

「長くないかも知れないねえ、この街も」

店を出ようと二人の背を、老婆の声が追う。

「ライアスリート様が生きていらした時は、こんなこと考えたこともなかったんだけど」

嫌な予感がした。

周囲の空気が、変質したかに思えた。老婆が、ライアスリート・フィルサーナの名を出した瞬間に。

そして、アデイスラーンは振り返った。振り返ってしまった。

「素晴らしい方だった。邪神に蹂躪された街を、あの方は見捨てなかった」

マーシィは、振り返らなかった。今いる位置と扉までの距離を測る。あと数歩だ。

「ライアスリート様がこの領地をお継ぎになったのは、あの方が十歳の時だったっけねえ」

老婆は、続ける。その口調には抑揚がない。

「よく似ていらしたよ、あんたに」

右手に剣を、左手にはアデイスラーンの腕を掴む。

「帰って、いらしたんですね。アデイスラーン様」

マーシィの剣が抜き放たれた。とっさにアデイスラーンを背後に庇ったのは、いつもの癖だ。

そして少女の目に映ったのは、マーシィを　その後ろの少年をじっと見つめる、老婆の眼だった。

その眼をマーシイは知っている。以前に通りがかった街道で、うち捨てられるように転がっていた難民の眼だ。あるいはどこかの町で見かけた、子供を攫われた母親の眼。

救いを求める、眼。  
たまらない。

マーシイの手が、剣から離れた。

そんな眼を向けられても、自分には何も出来ない。今の自分は小さな子供達を守るだけで精一杯。それ以上の力なんか、何処にもない。

だから、今は。

「アデイスラーン様、どうか……」

「やめて！」

老婆の言葉を遮り、マーシイはくるりときびすを返す。

いつかは必ず 力を身につけるから。

私のせいで死んで行った人たち。私を庇って命を落とした人たち。その人たちに誓った。いつか、力を身につける。あなたの子供達を守る力を。

でも、今は。

今はもう少し、時間を下さい。

あの時流した同じ涙。あの時に負った心の傷。せめてそれが癒えるまで。

マーシイは、アデイスラーンを見てはいなかった。だから、少年がどんな表情で老婆を見つめていたのかは知らない。

ただ、駆け出したマーシイに彼はついて来た。掴まれた腕を振り払わず、マーシイと共に店を飛び出す。

大通りから路地に入り、人を突き飛ばしながらも気にせず走り続ける。

やっと立ち止まり、振り返る。

老婆は、追っては来なかった。

あの老婆が何者なのか。敵か、味方か。今となっては解らない。

ただ、あの老婆は少なくともアディスラーンを知っていた。五年前に死んだ筈の領主の息子が、成長して帰って来たことを知ってしまった。

ネイルだったら、どうしただろう。

息を整えながら、マーシイは彼女らの旅の同行者を思い出す。

あの冷たい瞳の男は、どういう反応を示しただろう。

いつものように、平然と切り抜けただろうか。それとも力で屈服させたか。

どちらも、あたしには出来ないな。

軽く息をつく。

老婆を信じ、話を聞くとという選択肢もあつた筈だ。でも、それも出来ない。自分には守らなければならない『子供達』がいるから。

邪神の使徒や妖魔は、敵だ。自分達を執拗に狙う。そして、自分達にはいつかそいつらを滅ぼすという使命がある。生まれながらに、奴らは敵だった。

しかし、人間は解らない。彼らは善にも悪にも染まってしまふ。

信用していた者が、明日には裏切る危険をはらんでいる。

荒んだな、あたしも。

もう一度嘆息し、隣に立つ少年を見上げる。

「ごめんね、アディスラーン様」

走ったせいで、頭に巻いた布から不思議な色合いの髪がこぼれている。一度布を解いた少年は、小さく首を振った。綺麗な色合いの髪が揺れる。

「謝らなくていい。私も、あの老婆の期待に答えられることなど出来ないんだ」

言いながらアディスラーンは、剣を差し出す。

マーシイが取り落とした剣だ。マーシイは落としたことにさえ気づかなかつたのに、それを拾う余裕があつたアディスラーン。

初めて出会った時もそうだった。

がむしゃらに敵に向かつていくマーシイとは違い、的確に弱点を

見抜いたのは彼だった。

「アディスラーン様は、強いじゃない」  
ときどきした。初めて会った時。

マーシィにはない、洗練された剣技。そして彼らを守った不思議な力。

自分には、ない力。それを補ってくれる仲間。

やっと、運命の仲間巡り会えたのだと。こうやって足りない力を補い会いながら、そうして自分達は少しずつ強くなって行くのだと。

それを教えてくれたのがアディスラーンの存在だったから。

だが、そんなマーシィの言葉に少年はどこか自虐的な笑みを浮かべた。

「本気で、言っているのか？」

「だって、剣も魔法も……」

言いかけて思いつく。

そうだった。彼の幼い妹は、彼と自分達がそんな運命の出会いをしていた時に死んだのだ。

彼が目を離れたほんの数刻の間に殺されたのだ。

「剣も魔法も、中途半端なんだよ。私は」

魔法は永遠ではない。

「仲間」の存在を知り、彼らに出会うためにアディスラーンは幼い妹を守護結界の中に残して行った。

その効果が残っている間に戻れば、その間に彼の魔力をしのご敵がその場に現れさえしなければ、問題はなかったのだ。

結界が破られたと知ったアディスラーンが駆けつけた時には、手遅れだった。

敵は強かった。それでも。

「逃げる勇氣すら、私にはなかった」

アディスラーンが告げる。

妹の元に駆けつける、アディスラーン。

「無理だ。逃げる」と、最初からネイルは言っていた。

そんな彼に、「一緒に戦わせて」とマーシイは懇願した。

「あの人はあたし達を助けてくれたんだよ。それなのにネイルは見捨てるの？」と。それに対するネイルの返事は、「彼を連れて逃げろと言っているんだ。言っただろう？ 餓鬼共はまとめて面倒を見ると」というものだった。

ネイル。ずっと自分達を導いてくれていた、冷たい瞳の『識者』。導くと言うより、子守を押しつけられていたと言うべきかも知れない。どんな時も優しい言葉なんかかけてくれない。気遣ってくれない。厄介者あつかいを止めてくれない。

「また逃げるの？ 誰かを犠牲にして？ 今度は誰が犠牲になってくれるって言うのよ！」ずっと心に秘めていた言葉を、叩きつけた。

父も死んだ。母も死んだ。アインも、ミアナもリヒトもデュートもガウデイも。

自分達よりずっと強かった人たちが、自分達を守って死んだ。

「行きなさい」そう言ったのは、エリユーゼイア。

ファランシアの母だが、マーシイはずっとお姉さんぐらいに思っていた。

人前ではすぐ立派に見えるのに、それらから解放されると少女のように笑い、怒り、拗ねる。そんな人だった。

「背後は私に任せて、行きなさい。どうせ、何を言っても聞かないんだから。あなたはあなたがしたいようにしなさい」。彼女はそう言った。

「あたし、そんなに聞き分け悪かったかなあ」。マーシイの問いに、エリユーゼイアは笑った。「聞き分け良い振りをするのは、あなたらしくないって事よ。いつでも自分に素直なマーシイが私は大好きだから」そう言って背中を押ししてくれた。

その彼女ももういない。

アディスラオンとエリユーゼイアの魔法の力を借り、マーシイた

ちは妖魔を倒した。

助け出された少女は、死の一步手前で エリユーゼイアがその幼子に奇跡の魔法を施している時に、それは起こった。

倒したと思っていた妖魔の尖った尾がエリユーゼイアの胸を貫いたのだ。

マーシイのせいではないと、ネイルは言った。少なくとも、彼女はお前の犠牲になったわけではないと。

奇跡の力の使い手は、魔物に一番に狙われる。今まで生き残れた事の方が奇跡に近いと。

そんなこと、今、言わなくてもいいじゃない。

フアランシアの前で言わなくてもいいじゃない。

泣きながら、子供みたいに駄々をこねている自分がそこにいた。

「マーシイ？」

呼ばれてマーシイは我に返る。

頬を伝う涙をぬぐい、マーシイは顔を上げた。

あたし、いつから泣いていたんだろう。そう思うと照れくさくて。

「ごめん、嫌なことを思い出させたね」

マーシイは小さく首を振る。

「嫌な事ばかりじゃないから」

辛い時ほど前向きに考えよう。どうせ、なるようにしかならないんだから。

明日になれば明日の風が 吹かないなら自分で風をおこすまでのこと。

それがマーシイの基本だ。その基本を覚えてくれたのが誰だったのかは覚えていないが。

「アディスラーン様、覚えてる？ あの時の事」

肉体を滅ぼしただけでは、妖魔を倒したことはない。それは知っていた筈だった。

妖魔は、剣では倒せない。奴らに、本当の意味の死はない。奴らは肉体を滅ぼされても、邪神の力を受けて何度でも再生する。

邪神を倒す力。妖魔と邪神の絆を引き裂く力。必要なのは、その力だ。

エリユーゼイアが倒れた、その直後の事はマーシイはよく覚えていない。

ファランシアの悲鳴。額が燃えるように熱かった事。そしてアディスラーンとセティが、確かに自分と一緒に居た。

ファランシアの痛み。そしてそれに負けまいとする心。理不尽と怒り。そんな様々な思いがその時、共鳴した。

マーシイが覚えているのは、そこまでだ。

だからどんな力があの妖魔を滅ぼしたのかは解らない。

「私は、マーシイに引きずられた感じだったな」

と、アディスラーンは苦笑する。

「そう？ あたしは完全にシアに引きずられていたけどね」

よく覚えていない。

でも、必要なのはその力だと思った。そして、大切な人を失わなければ発動しない力なら、いらなとも思った。

勿論、そうならない為に努力が必要なのだろう。

希望とはまだ呼べない。小さな力。

「今のままでは、まだまだ足りないのは解っている。でも、こんな小さな力でも妖魔を倒すことが出来た。だったら、いつかあの竜王を倒すことも出来るようになるかも知れない。そう思う事にしたんだ」

背中を手を組み、背伸びをするようにしてマーシイは北西の空を見上げる。

遙かな故郷であるあの村はあちらの方角の筈。

「竜王？」

訝しげに尋ねるアディスラーンに、マーシイが小さく頷く。

「あたしの村を滅ぼした大きな蛇。魔道師は、大海の蛇王って呼んでいたって」

故郷、レイスタが壊滅したのは、邪神の使徒によるものではなか

った。精霊王が邪神を大地に封じた折りの余波が、今ひとつの怪物を目覚めさせたのだ。

竜王と呼ばれる。前世紀から生きている巨大な蛇。神に匹敵する力を持っていると伝説は語る。

「あたしにも、弟がいたんだ。アインっていつてね。歳はセティと同じ」

マーシイが覚えているのは、闇の夜に何本も走る稲妻。

世界が終わるのだと何度も何度も呟いていた隣家の老婆の声。

「あたしは、シアを抱いていた。アインは聞き分けの良い子だったから、あたしの側を離れるわけがないと思っていたの」

弟がいないことに気づいた時、既に村は火の海だった。

母親は、アインを捜して火の中に飛び込もうとして 止めたのは、ネイル。

ネイルがどう言って母を説得したのかはマーシイは知らない。

「あたしは、あの日のことは忘れない。いつかきつと、あいつを倒せる力を手に入れて、故郷に帰る」

今はまだ、それだけの力もない。

怪物どころか、妖魔すら倒せない。

でも、いつかは。

「竜王を倒せば、レイスタの戦士達も、きつと戻って来てくれると思うの。ううん。コルノス中の戦士が私たちに力を貸してくれるわ。そうしたら、少しは希望が持てると思わない？」

そう言っって見上げたアディスラーンは 笑っていた。

「君には、叶わないな」

そう言ってくすくすと笑い続けるアディスラーン。

それは、マーシイの想像とは違う反応だったので、「何よ」と少し不機嫌に問いかける。

「普通に、順序が逆だろう？ 神に匹敵する力を持つ竜王を倒せるようになるなら、きつと邪神の使徒ぐらい倒せる力が身についていると思うな」

「そうなのかな」と、マーシイも考える。

「だから、招集をかけるなら竜王を退治の前にしないかね」  
それだって、いつになるか解らない話だが。

「それにしても、大地の蛇王が封じられていた村の出身者か。だから『しるし』を持つ者が三人もいたのかな」

「アデイスラーン様は、ひとりだったんだね」

彼の妹、リーンは『しるし』を持たない普通の女の子だった。

彼は、たった一人でその力を高めていたのだろう。だからこそ、強い。アデイスラーンは剣も魔法も中途半端だと語っていたが、きつと剣の腕だけでもマーシイより上だと思う。

少しだけ、悔しいけど。

などと思っていたら、

「マーシイ、私のことは、『ラーン』でいい。『様』もいらさないよ」  
そう言っただアデイスラーンは笑う。

「勿論、『兄さん』でも良いのだけど」

そう、先ほどの雑貨屋でアデイスラーンのことを「兄さん」と呼んでしまったマーシイである。

彼の本名を呼ぶわけにはいかなかったので、咄嗟の機転だったのだが。

「ごめん、同じ年なのにね。でもなんだか兄さんって感じなのよ。

アデイ……ラーンって」

「私も可愛い妹が出来たと思っているよ。あと、可愛い弟たちも」  
笑うアデイスラーンからマーシイは視線を逸らす。顔が紅潮している事に気づいたから。

何故ここで「可愛い」に反応するんだと、マーシイは自分に叱咤する。言われ慣れてないからなのだろう。多分。

アデイスラーンから目を逸らすと、彼が手に持つ包みが目に入る。そう言えば、お釣りをもらうのを、忘れていた。勿論、取りに戻るわけには行かない。

「買い物もまともに来ないのか」。黒髪の青年の、冷たい声が

聞こえるような気がして肩を竦めた時だった。

「子供だと思つて、なめてんじゃねーよっ」

何か壊れるような音に混じつて、聞き慣れた怒声がマーシイの耳を打つ。

「まさか、ねえ」

小首を傾げながら、アデイスラーンに向き合つ。

「私は、そのまさかだと思つ」

自分もそう思っていたので、彼がその言葉を言い終えぬうちにマーシイは駆け出した。

二人の予感的中した。いま出た路地からそう離れていない所で、革鎧の三人組とやりあっているのは、セト・ナティとユート。ファランシアまで、どこから仕入れて来たのか竹の竿を構えている。

「何をやってるのよ。あんた達！」

マーシイの声に気づき、ユートが振り返る。動きを止めた少年の首に、頭頂が禿げあがった男の腕が回された。

「マーシイ！」

アデイスラーンから手渡されたものを、マーシイは頂点はげに投げ付ける。

さほど狙いをつけたわけではないが、それはユートの頭上を通り過ぎ、頂点はげの額に当たった。

にぶい音をたてて南瓜が割れた。その瞬間には、既に走りだしている。

「油断は禁物よ、ユート」

頭を抱えてうずくまる頂点はげの股間を蹴りあげ、動きを止める。アデイスラーンもそれに続いた。すきつ齒の男の不意をつき、剣の柄を鳩尾にたたき込む。

その間にセト・ナティの方も、決着をつけたようだ。眼帯の男が、地面に転がっている。ちなみに押さえているのは頂点はげと同じ場所だ。

門前の小僧は、あえて教わらなくともその程度の技を身につけるものである。

「あ、あんだ達。どうして……」

肩で息をしつつ子供達を睨みつける、マーシィ。ファランシアが若草色の瞳を潤ませ、ユートがうなだれ、セト・ナティがそっぽを向く。

「話は後にしよう。マーシィ」

地面に伏したまま呆然と彼らを見上げている老人に手を貸して立たせてやりながら、アディスラーンが声をかけた。

慌ててマーシィもそれに習い、難民の少年に手を差し伸べる。

集まりつつあったやじ馬に愛想笑いを返し、その場をそそくさと立ち去って 五人が、町外れの森にあるフィルサーナ家の別荘に戻る頃には、西の空は濃紺色に染まっていた。

## 第一章 子供達 2 (後書き)

ファランシア「作者さん、お伺いしたい事がありますの」

作者「何ですか？ ファランシアちゃん」

ファランシア「二日目からいきなり不安になりました。これって終わりますの？」

作者「(笑って) 顔が可愛いから得したよな。マーシィやったら殴ってたで」

ファランシア「あら、マーシィがただで殴られてたとは思えませんわ」

作者「しくしく。観念して答えます。エピソードだけは決まっていますから大丈夫だと」

## 第一章 子供達 3

「餓鬼共、何をして来た？」

帰って来た子供達に、黒髪の痩せた青年は冷ややかな声でそう告げた。

彼の名はネイルという。子供達が生まれ育った村の『識者』で、子供達の後見者だ。

子供達は、言葉もなくうなだれている。いや、うなだれているように見せかけて上目使いに睨みつけている子供もいた。勿論セティだ。

少年は、この男が嫌いだった。

彼の射抜くような、黒い眼が大嫌いだった。氷のように冷たく、闇夜の湖のように底知れない。

長い黒髪は、結わずに背に垂れている。レイスタ独特のしきたりのひとつだ。

子供である間は男女ともに髪を伸ばし、一人前と認められた男は髪を切る。髪の長い男は、何らかの理由で『成人の儀式』を行わなかった者。結わずに垂らしているのは、村の長老に継ぐ地位にある者を意味している。

『識者』という称号を受けたことで、彼はその髪型を許された。

既に村が存在しない今となっては何の意味もないしきたりだが、それが彼のけじめなのだろう。

子供達の反応を見届けると、ネイルはマーシィに視線を向ける。

「子守りひとつ出来ないのは、相変わらずか」  
抑揚のない口調が告げた。

せめて怒鳴ってくればまだ救いがあるのにと、マーシィは思う。この男にそれを求めるのが間違いだということは、長い旅の間に解っていたが。

「ごめんなさい」

弁解はしない。子供達の行動は、マーシイには予想出来て然るべき事だったから。

「マーシイは悪くありませんわ」

金色の髪少女が、二人の間に割って入った。

「それにわたくし、後悔していませんのよ。みんなで力を合わせなければならぬ時に、人間が人間を傷つけるなんて、アトレーヌ様はお許しにはなりませんわ」

「ファランシア」

よく通る澄んだ声が一気にまくしたてるのを、ネイルは一言で制した。

「アトレーヌモラ・ナ・レーンも、過去の幻影だ。信仰を失った者に聖女アトレーヌの慈愛の尊さを説いた所で、何の意味もない」

ファランシアは、言葉を詰める。数秒の沈黙の後に、若草色の瞳が煙った。

「それは、違いますわ」

やっと絞り出した声は、弱々しい。

「人を愛し、思いやるのはとても大切な事です。それなのに怖い事がありすぎて、多くの人がそれを忘れてしまっている。わたくしたちが諦めたら、一体誰がそんな人々に慈愛の心を思い出させるのですか？」

話しているうちにいつもの調子が戻って来たのだろう、自信を持って言い切ったファランシアに、ネイルは額を軽く押さえて嘆息する。

「エリユーゼイアの受け売りか」

確かにその通りだったので、ファランシアは少し頬を紅潮させる。

「わたくしは、間違った事は言ってません」

そう。確かに今、ファランシアが口にした言葉は母親であるエリユーゼイアが彼女に教え、諭した言葉をそのまま再現したものだ。

だが、それが間違った事ではないことぐらいは幼い少女にも解っている。

その言葉を実行しようと、あの日に誓った。

「ならば、聞こう。その連中に、お前達は何をした？ 暴力で対抗して、拳げ句に逃げ出したのだろうか？」

それも事実だったので、フアランシアの頬が更に赤くなる。

「中途半端な人助けは、やめておけ」

「見なかつた事にしろと？」

少女の声は既に涙声になっている。

「最後まで責任を持ってないならば手を出すなど言っている」

「それでは、わたくしが生きている意味は……」

言いかけて、フアランシアは沈黙した。

くるりとネイルに背を向けると、先刻入って来たばかりの扉に直行する。

「頭を、冷やしてきますわ」

戸口に消えたフアランシアの後を追って、数歩足を踏み出したセト・ナティが、思い出したようにネイルを睨みつける。

「そこまで、言うのかよ」

セト・ナティとネイルの黒い瞳が、交錯する。

「母ちゃんを亡くしたばかりのシアに、あそこまで言うのかよ……！」

ネイルは、答えない。黒い眼には、何の感情も浮かんでいない。

「ラ・ナ・レーンは、幻なんかじゃない。だって、俺達は……」

セト・ナティの右手首には赤い布が巻かれていた。マーシィの額の布と同じものだ。ちなみに、フアランシアの左上腕部の服の下にも、同じ色の布が巻いてある。

その布を、引きちぎらなければかりの勢いで、セト・ナティは掴んだ。

「俺たちは……」

「やめなさい、セティ！」

マーシィの口をついた制止は、自分で思った以上に厳しい声だった。セト・ナティが数歩後じさり、黒い瞳には戸惑いの色が浮かぶ。しかし、それは一瞬。

「マーシイは、いつもそうだ」

ネイルに向かっていた憤りを、そのままマーシイに向ける。

「俺だって、ちゃんと考えているよ。俺たち、邪神と戦う為に生まれて来たんだろ？ それなのに、ネイルは認めようとしなない。俺たちが子供だから。ラ・ナ・レーンに選ばれたのが、子供だからって

……」

「ユート」

そんなセテイの叫びには耳も貸さず、ネイルはフアランシアを追おうとしているユートに声をかける。

「魔法は、使わなかったらどうなる？」

冷たい眸に見据えられ、金茶の髪の少年はただ頷いた。

「ならば、いい。未登録の妖術使いの存在を、悟られるわけにはいかないからな。奴らにも『魔道の塔』にも」

ネイルは、いつも必要なことしか言わない。彼は自分の持つ知識の最低限だけを口にして、子供達を縛るのだ。

「どうして？」と、ユートが尋ねる。しかし、ネイルは答ええない自分たちで考えろと言わんばかりに、口をつぐむ。

「未登録の妖術使いは、危険なんだ」

代わって、答えを口に出したのはアディスラーンだった。

「魔力を持つ者は『魔道の塔』に細かく識別され、監視される。

ええと、見張られているんだよ。そして『魔道の塔』に従わない者には、恐ろしい罰が与えられる」

「じゃあ、その『魔道の塔』に認めてもらえればいいの？ そうすれば、僕も戦えるの？」

自分の力が役に立てることを知ったユートの嬉しげな言葉に、ネイルは嘆息した。

お前は、何も解っていない。言外にそう告げている。

「本当はそうするのが一番いいんだろうね。でも『魔道の塔』は、昔のような力は持っていないんだ。塔の機能がどこまで正常に働いているのかも私たちには解らない」

彼らの長い旅の間にも、魔道師 額に特有のサークレットを持つ者に出会ったことは、ほとんどない。邪神は、覚醒の折りに障害になりそうなものを最初に叩いたからだ。

一つは、精霊王の力を受け継ぐフィルサーナー族。一つは、文化の中心地であるミノアにある『魔道の塔』と、世界に点在する魔石の守護者。そして、ラ・ナ・レーンの賢者と奇跡の力を行使する神官。

「『魔道の塔』と連絡を取れば、必ず邪神の使徒に気づかれる。そうなるのは危険なのは解るだろう？ 君も、そして他の子も」

アデイスラーンに諭され、ユートはしばし首を捻る。

「えーっと、『しるし』を持つてるマーシィ達も危険だっという意味だよね？」

自分なりの答えを出すユートに、アデイスラーンが微笑みながら頷き、

「いい子ね、ユート」

マーシィの腕が、少年の金茶の頭を抱きしめる。

「成程、な」

抑揚のない声が、その場の空気を凍りつかせた。

アデイスラーンの講釈を黙って聞いていたネイルの眼に、初めて感情のようなものが浮かんでいる。

それは、嘲笑？

「あなたも信じておられるわけだ。十三の戦士などという妄想を」  
薄い唇が、僅かに吊り上がった。

「妄想？」

アデイスラーンは、驚いたようにレイスタの識者に視線を移す。

「あんなものは、人間の勝手な希望が生み出した迷信に過ぎないと、私は思っている」

ネイルの言葉に、マーシィが下を向いた。

そう。ネイルはいつもそう言う。

お前らが特別だと思つな。俺は、お前らが子供だから守っている。

もちろん慈愛とかいうものではない、これは大人の義務だからだと。

一番、大切な所で突き放す。

「しかし、私たちは現実に出会った」

右肩を押さえながら、アディスラーンが告げる。

その言葉に、マーシイも赤い布に隠された額を抑えた。

そこにある、「仲間」の証。

「おおかた、血が呼びあつたのでしよう。精霊王の血統とやらが」

「違う！ 俺にも、見えた。あれは、絶対にラ・ナ・レーンの力だ！」

二人の会話に割って入ったのは、セト・ナティだった。

「ネイルは、何も解ってない」

唇を噛み締め、少年はネイルを睨みつける。正面から。揺るぎない瞳で。

「では、お前たちに何が出来た？」

そのまっすぐな瞳を、ネイルは平然と受け止めた。

「奴らが恐れるような力が、邪神を倒せるような力が一体どこにある？」

セト・ナティは、答えない。ネイルの言うのは、事実だから。決して肯定してはならない、それでも事実だったから。まっすぐな気性を持つ少年は、ただ沈黙した。

「世界の運命を担うだと？ 笑わせるな。お前たちはただの子供だ。ひとりでは何も出来ない。何の力もない。ただの子供なのだ」

たたみかけるネイルに、反論は出来ない。セト・ナティの口を突いたのは、一言。

「馬鹿野郎」

言い捨て、大股で部屋を出るセト・ナティ。複雑な視線をネイルに送った後、ユートもまたその後を追う。

三人の子供達が姿を消すと、話は終わったとばかりに椅子に沈み込む、ネイル。お前たちも出て行けと、その態度は告げている。

マーシイはゆっくりと息を吸い、出来ればもう少し穏便な状況で言い出したかった言葉を口にした。

「悪い報告があるの」

雑貨屋での出来事を、手短かに告げる。

「クリステイナに教えてもらったお店だから、もしかしたら味方だったのかも知れないんだけど」

「お前にしては、なかなか良い判断だ」

疲れたように背もたれに縋りかかり、ネイルは瞳を閉ざしたままで答える。

「その老婆が何者であれ、今はクリステイナ殿の帰りを待つしかあるまい」

「それまで隠れているしかないの？ 本当にそれでいいの？」

もしかしたら味方だったのかも知れない。この街の人間は、未だ希望を捨てていないかも知れないのに。

ネイルは、ゆっくりと身を起こした。氷の瞳が、マーシイを射抜く。

彼は小さく嗤った。

「安心しろ。この館は精霊によって隠されている。並の者は惑わされるだけだ」

平然と、マーシイの問いをはぐらかす。

何を言っても無駄なのだ。ネイルは決して自分の本心を語らない。十年も側にいるのに、ネイルとマーシイの間には、頑なな壁が立ちただかり続いている。

「ネイルは、ラ・ナ・レーンを信じなくても精霊王の力は信じるのね」

想いは、いつも通じない。

「眼で見たものは、信じることにしている」

これ以上の議論は、無駄なようだった。

子供達の後を追いつき扉に向かう、マーシイ。

「識者ネイル」

そのマーシイの背後に、アディスラーンの声が響いた。

「ラ・ナ・レーンを幻想というあなたが、何故、あの子たちを導くのか」

「約束があるからだ」

それは、マーシイがよく知っている答えだったので、マーシイはそのまま扉を閉ざした。

子供達は、すぐに見つかった。館を出てすぐの場所にうずくまる  
フアランシア。セティとユートが、その傍らに立っている。

「大馬鹿野郎だ。ネイルもマーシイも」

憤然と、セティが喚いていた。

「こんな所に隠れているだけじゃ、どうにもならないじゃないか」  
「わたくし達に力があれば、少しは変わっていたのでしょうか」

フアランシアは、忘れたわけではない。傷ついた母親に施した彼女の治癒の魔法は、気休めにもならなかったことを。

力があれば。ラ・ナ・レーンに認められた力が本当にあるならば、母は死なずにすんだ筈だ。

「力ならある。エリユーゼイアが、いつも言ってたじゃないか」

そう言って、セト・ナティは手首に巻いた布を外した。

そこには中指程の長さの痣が、くつきりと浮かび上がっている。

一本の枝に生じた、一枚の木の葉。

邪神ミゲルが誕生した時、ラ・ナ・レーンは天樹の枝から十三人の戦士を創造した。神の力を受け継ぐ者を。

天樹の葉の痣をもつ者。それが、ラ・ナ・レーンの子供達のもの  
しである。

「俺たちは、十三の戦士だ」

フアランシアは、そつと左の上腕部を押さえた。そこにも、同じ  
『しるし』がある。

「力はあるんだ。俺たちの中に。戦わなければ、道は開けない」

「無謀な戦いを、ラ・ナ・レーンはお望みにはならないわ」

音もたてずに、マーシイはセト・ナティの背後に立つ。

「お説教は終わってないわよ」

腰に手を当ててマーシイが低い声で告げる。

三人の子供達は、ふてくされたように、あるいは恥じ入るように、あるいは他人の振りをするようにそっぽを向いた。

「一番最初に言い出したのは？」

「俺だよ！」

叫んだのは、セト・ナティだった。

「でも、俺は悪いことしたとは思ってないぜ。何だよ、いつもいつも俺たちのこと子供扱いしやがって……マーシイだって、充分子供じゃないか！」

「尻尾つきが、偉そうなことを言わないの」

ぐつと、セト・ナティが口ごもった。

マーシイの髪は、短い。美しい漆黒の髪を、マーシイは惜しげもなく切り捨てた。十五歳の誕生日に。

『切るにしても、もう少し何とかならなかったの？』

嘆きながら、不揃いな髪を切り揃えてくれたのはエリユーゼイア。

マーシイの長い髪を、本人以上に大切にしていた女性だった。

十五歳。狩猟民族であるレイスタの民にとっては、成人の年だ。

子供はその年に、自分の生きざまを決める。

『尻尾つき』とは、レイスタでは子供を意味する。伸ばした髪を尻尾のように背後で括るの、子供のしるし。守られるべき者の、あかし。

男ならば髪を切り捨て、女は結び上げる。戦士を選ぶならば

切り捨て、家を守ることを選べば、邪魔な髪を結う。どちらも選ばなかった者は、ネイルのようにそのまま長く伸ばす。

マーシイは選んだのだ。男と同じように、武器を手に戦うことを。もつとも戦う相手は狼でも熊でもなかったが。

「そ、そんなもの。俺だってあと三年もすれば……」

言ってしまうって、セト・ナティは墓穴を掘ったことに気づいたよ

うだ。

少年が成人と認められるまでには、あと三年。髪が長い間は子供扱いされても、仕方ない。

「解ったみたいね。じゃあ、もうひとつ思い出して頂戴。あたしとの約束は、何だったかな？」

「……目立たない」

ユートが、小さな声で呟く。

「騒がない」

フアランシアが、頂垂れる。

「うるつかない」

セト・ナティが、そっぽを向きながらも、締めくくる。

マーシイは、大きく息をついた。

ここにいるのは、昔の自分だ。邪神の使徒から逃げ出し、戦火に脅える村々を後にする生活に歯痒さを感じていた。ネイルとも、何度も対立した。今だって、本当は……。

十五歳という年齢を迎えても、ネイルは、絶対に対等には扱ってくれない。

いつまでも、子供扱いだ。

「解っているなら、その『しるし』を隠しなさいって。そんなものがあつたって、どうせ何も出来ないんだから」

いつからだろう。子供達に、本心を言わなくなったのは。

彼らが、自分と同じ心を持っていることに気づいたのは、いつだっただろう。

真っ白な魂が、自分に影響されて行くことの怖さに、気づいたのは。

「マーシイは、いつだってそうだ」

セティの黒い瞳が、マーシイを捕らえている。

「俺たちの理解者みたいな顔をしていて、俺たちの気持ちなんか、解ってないんだ」

瞳は鋭い矢になって、正面から、射抜く。

「マーシイも、同じだ。ネイルと同じ、ただの臆病者だ！」

「セテイ！」

振り上げた右手が、叩きつけられることは、なかった。

ここにいるのは、かつての自分。自分を前に、嘘はつけない。

「困った、子ね」

両手でセト・ナテイの頬を包み込み、マーシイは膝をつく。視線の位置が、同じ高さになるように。

「でも、あたしはそんなあんたが大好きよ」

マーシイに向けられる、真つすぐな瞳。かつてマーシイも、同じ瞳をネイルに向けていた。今でも、本当は失われてなどいない。

「でもね、セテイ。今のあたし達はまだ、小さな希望に過ぎないわ。邪神の魔力を打ち破るのに必要な仲間が揃っていないの。あたし達の旅は、仲間を見つけ出す為のものでしょうか？」

欺瞞だ。

ネイルは、そんなことは考えていないのかも知れない。少なくとも、そんな風には言ってくれない。

十年かかった。四人目の仲間、アディスラーンと巡り会うまでに。それまでに、自分たちは何をした？　ただ、逃げていただけ。現実から目を背けて、逃げていただけ。

自分で納得できない事を、他人に説くことが出来るほどマーシイは器用ではない。

案の定、マーシイの迷いを、セト・ナテイは正確に読み取った。

「ネイルなんか、ついに行ってるからだよ」

セト・ナテイの言葉には、容赦はない。

「ネイルなんか、俺は認めない。戦うこともせずに、一人で生き延びた奴なんか」

「そうやって、ネイルはあたし達を守ってきてくれたんじゃないの！」

マーシイは、叫んだ。その叫びには、セト・ナテイを黙らせる説得力があった。

「どんな時も諦めずに、あたし達を導いてくれたのは、ネイルじゃないの」

ネイルは、マーシイの父の弟。叔父に当たる。生まれた時から、体に欠陥を持っていた人。二十歳まで生きられないと言われていたらしい。

疲れやすく労働に向かない体質の彼は、村では異端だった。狩りに出られない男は、成人とは見なされない。彼が『識者』の道を目指したのには、そんな背景がある。

幼いマーシイが覚えているのは、時折相談に来る村人に至極丁寧に、他人行儀に対応している姿。誰とも親しく付き合わない。決して笑わない。話しかけても、かまってもくれない。

嫌な人だと、思っていた。

そんな彼が、語りかけてくれた。

村が壊滅した時、弟のアインを見失い、飛び出しかけたマーシイの手を引いたのは、ネイルだった。

『今、出て行っても死ぬだけだ』

手を振り払おうともがくマーシイに告げられた、声。

『無謀な戦いが、必要な時もある。しかし、お前にはまだ早すぎる』  
あれは、初めて見せた彼の真実ではなかったのか？

旅を重ねる間、ネイルは優しくなかなかった。子供達を、いとおしんでくれたわけではない。共に生き延びた者たちとも対立し、すぐに別れることになった。ネイルに従ったのは子供の身を案じたフアランシアの母、エリユーゼイアと他に数人。

ネイルは、大きなことを考えている。無謀な戦いをしかけ、死んで行った彼らが考えなかった未来のことを考えている。

それが、十年の間にマーシイが出した結論だ。

信じようと思った。ネイルは、自分達を導いてくれる。未来に。

マーシイは、ゆっくりと首を巡らせた。

セト・ナティの黒い眼が、フアランシアの若草色の瞳が、ユート

の琥珀の目が、彼女を見つめている。

アデイスラーンを含め、ここにいるのは子供が五人。

エリユーゼイアは語ってくれた。セテイの両親は、鬼のように強かったと。フランシアの父は、希有な精霊使いだったと。

今、彼らはいない。

今の自分たちより、きっと何倍も強かった人々は皆『聖戦』に散った。

「あたし達は、生きなければいけないの」

彼らに託された、未来。神に与えられた、使命。子供達はまだその重みを知らない。マーシイ本人も、本当に理解出来ているわけではない。

「ネイルは、あたし達に道を示してくれる。その道を、あたしと一緒に歩いて欲しい」

ラ・ナ・レーンは、見守ってくれている。でも、今日まで自分達を導いてくれていたのはネイルだ。

「マーシイ……」

華奢な指が、マーシイに触れた。

「わたくし、マーシイを信じますわ。ネイルにも従います。今

日は、本当にごめんなさい。二度と無茶はいたしませんわ」

真摯な面差しで決意を表明する、フランシア。だがマーシイは知っている。その決意が三日後にも残っている保証は、全くないと言うことを。

「僕、強くなるよ。いつかマーシイを守れるぐらい、強くなる」

肩に栗鼠を乗せ、ユートが告げた。

「馬鹿。お前じゃ、頼りになんないよ」

セテイが金茶の頭を小突いた。

「そうだな。まずは、強くなる為の勉強から始めようか」

背後で、不意に声がかかった。

子供達が、飛び上がる。

「いつからいたの？ ラーン」

月明かりの下に、アデイスラーンの不思議な色合いの髪が浮かび上がっている。

「どうにも、声のかけづらい様子だったからね。話が落ち着くまで待っていたんだ」

アデイスラーンが、穏やかに笑った。

「ネイル殿に許しを貰った。ファランシアとユートは、明日から魔術学の勉強だ」

勉強と聞き、更にその中に自分の名前がなかったので、セティはおもむろに安堵の息を吐いた。アデイスラーンは、それを見逃してはいない。

「セティは、マーシィと剣の稽古。君たちを退屈させておくと、困ったことになりそうだからね」

新参のアデイスラーンにまで言い当てられて、子供達は決まり悪そうにそっぽを向く。

「でも勉強つて、ラーンが教えるの？」

それらの様子に微笑ましく見つめながら、マーシィは疑問を口に出す。

「しがない精霊使いでも、それなりの知識ぐらいはある」

「ご自分でしがないっていうのは、どうかと思われませう。ラーンは、精霊王の末裔ですのに」

何故か少し誇らしげに告げる、ファランシア。

「そうなの？」

実は、精霊王が何かという知識を持っていなかったマーシィが目遣いにアデイスラーンを見上げる。

「実はずっと聞きたかったんだ。精霊王ってなあに？」

その言葉に、意外そうにアデイスラーンが目を見開く。

「そんなにびっくりしなくていいじゃない。この街が精霊王に守護されてる街だとか、シアとラーンが出会ったのが精霊王の巡り合わせだって言うから、まあ、そうなのかと……」

「特に聞かないから、てっきり知ってると思っていたんだ」

「精霊王フィルサーナが、邪神を封じることぐらいは知ってるわよ。で、新しい精霊王が誕生して、この街はその新しい精霊王に守られてるんでしょ？」

ネイルとクリスティアがそう言っていたので、そうなのかと普通に思っていた。

「さつき、ネイル殿もフィルサーナの血が呼び合ったって言っていただろう？ 現在の精霊王は　　ファランシアの父親で、私の叔父だ」

では、ネイルが自分の目で見た事は信じる事に行っていると云ったのは、本当に精霊王を見たという意味だったのかと今更ながらに思う。

「で、精霊王って何をしてる人？」

マーシィの問いに、アディスラーンは少し考える。

「一言では、答えにくいな。精霊と人間を結びつける存在って言えば解るかな？」

「ごめん、全然わかんないわ」

そもそも、マーシィには「精霊」の在り方が解らない。

故郷の村では「精霊祭」と呼ばれるものがあつたが、それは普通に収穫できるものを収穫できた事に感謝するお祭りだった。

それを何故「精霊祭」と呼ぶのか不思議に思った事もなかったから。

「そうですね。マーシィも一緒にお勉強をなさったら？　新しい世界が開けてよ？」

ファランシアの言葉に、

「晩ご飯の用意がまだだったわね。みんな、手伝って」

そそくさと立ち去るマーシィ。セト・ナティが続く。

後には呆然と立ち尽くすアディスラーンと頬を膨らますファランシア。そしてくすくすと笑うユートが残された。

そう、マーシィだってまだまだ子供なのだ。

## 第一章 子供達 4

人間が使用する魔法には、大きく分けて三つの種類がある。

世界を支えているラ・ナ・レーンの聖なる力に働きかけ、奇跡を行使する神聖魔法。個人の中に内在する力で様々な現象を引き起こす、古代魔法。そして、森羅万象を司る精霊の力を源とする、精霊魔法。

奇跡をもつて神の存在を説くのが、神官や巫女と呼ばれる階級の者だ。もつとも、全ての神官に奇跡の力が与えられているわけではない。比率としては、十対一。小さな村ならば、神聖魔法の使い手は先ずいない。

『聖人』だけでは神殿の経営は成り立たないというのは、俗物の見解だ。

次に魔力を持つ「文字」を媒体に様々な技を行使する、古代魔法。伝説に残される『旧世界』。ラ・ナ・レーンが君臨する以前の世界で魔力を持った人々は、楽園を築き上げた。不毛の砂漠に緑を芽吹かせ、遠く離れた場所に一瞬で行き来した。空も海も、全て彼らのものだった。

世界には、それを可能にする魔力が満ちていたから。それがどうして失われたのかは、定かではない。それ以前に、そんな御伽噺を信じている者は、ほとんどいない。今、世界を支えているのはラ・ナ・レーンの聖なる力と邪神ミゲルの忌まわしき暗黒の力なのだ。だが、稀にそのどちらにも属さない力を宿して生まれる者がある。一般に、魔道師と呼ばれる者。旧世界の文字を読み解く力を持ち、それを媒体に様々な魔法を使う者達だ。

そしてラ・ナ・レーンは旧世界の遺産とも呼べる魔道師たちに新たな力を授けた。精霊魔法 自分に変わり、森羅万象を司る精霊達を従える力を。

魔道師と呼ばれる者たちは、特別な人間だった。普通に生きる人

々とは、根本的に相入れない。『魔道の塔』と呼ばれる組織を築き、自らの力を高める彼らを、人々は尊敬すると同時に恐れた。その恐れが魔道師に厳しい戒律を、尊敬が一種のエリート意識を与えた。

『魔道の塔』は魔力を持つ者たちを管理し、細かく識別する。魔道師と呼ぶに適さない者 様々な系統の魔法を使いこなせない者や戒律に反した者は『妖術使い』と呼ばれ、魔道の塔の中でも最も低い地位が与えられた。

その妖術使いの中に、『精霊使い』と呼ばれる者がいる。

精霊の存在を感じ取り、その声を聞く事が出来る者。生まれながらに精霊に愛された者。精霊を支配するのではなく、その力を借り受けることが出来る者。かつて精霊を救う為にラ・ナ・レーンと契約した精霊王フィルサーナの末裔には、特に強い力が受け継がれている。

人間に使える魔法は主にこの三種だが、誰もがそれらの特別な力を身につけられるわけではない。どのような魔法であれ、魔法を使うには生まれつきの魔力 資質が必要だった。

多くは、遺伝という形で受け継がれる。神に生涯を捧げる筈の神官に妻帯が認められているのも、この為だ。強力な魔道の資質を残す為に、五親等以内の近親婚が繰り返されたシルノア王家の例もある。

稀に、資質を持たない家系から、強い魔力を持つ者が生まれることもある。彼らは神あるいは精霊の加護を一身に受けた者として、特別な使命を任されることが多かった。尤もその出生は、多くの家庭不和を生んだが。

ファランシアの場合は、典型的な遺伝だ。ラ・ナ・レーンの巫女を母に持つ彼女には、神聖魔法の資質がある。精霊使いだった父親の資質が受け継がれているのかどうかは、まだ解らない。

そしてユートは、どうやら後者らしい。少年の故郷であるレイスタに魔法の使い手が生まれたことはないと聞く。

「ファランシアの場合は、難しいな」

昼下がりの、森。館に近い大木の下。初夏の日差しを遮ってくれる木陰に、魔力を持つ者たちが集っていた。

精霊使いのアディスラーン。ラ・ナ・レーンの巫女見習いのファランシア。そして未登録の妖術使い、ユートの三人である。

子供達が大暴れした日から、二日目。昨日から始まった魔法の基礎理論の勉強は、二日目から個人相談に移行している。

どうすれば、魔法を使いこなすことが出来るようになるのか。

昼食後、金髪の巫女が問いかけた。

神聖魔法の使い方は母親から学んだファランシアだ。しかし、本当に必要な時に、少女の祈りは神に届かなかった。

母の死を乗り越える為にも、一層の信仰に励むファランシアだったのだが、想いだけではどうにもならないこともある。

「神聖魔法の習得は、一番難しい。『奇跡の光明』にしても『聖なる守り』にしても、神の力を具現するには、神の守護とそれを受け止める術者の力量、そして神の力を受け止める強い意志が必要だからね。思う結果が得られないのは、どれかが足りないんだ」

『奇跡の光明』とは、その名の通り様々な奇跡を生み出す魔法である。奇跡の内容は、主に怪我からの回復、病気の治癒、解毒など。熟練した術者は、死以外のいかなる状態をも、瞬時にして癒すことが出来るという。

「もちろん、それを難なく使いこなせる神官様もいる。神の寵児と呼ばれる者が。エリユーゼイア様のように」

言われて、ファランシアは項垂れる。

「いつまでもお母様の受け売りだけではいけない事は解っているんです。でも、どうしたらいいのか解らないんです」

この間も、ネイルに「ただの受け売り」だと言われたばかりだ。未熟なファランシアには、辛い一言だった。

生まれながらに授かった資質だけでは、どうにもならない。今の少女に必要なのは世界のあり方を知り、そして経験を積むこと。どんな絶望的な状況でも決して諦めないこと。神の存在を疑わないこ

と。

「それと、もう一つ」

沈んだ声を出すファランシアに、多少言いにくそうにアディスラ  
ーンが告げる。

「何故、君が精霊魔法を使えないのかが不思議なんだ」

「お父様だつて、最初から使えたわけじゃないって聞いてますけど」  
その問いには、唇を尖らせることしか出来ないファランシアだっ  
た。

そう、ファランシアの父親、ロディステイは精霊王フィルサーナ  
に代わつて肉体を捨てて精霊界へと戻つた。新たな精霊王となり、  
精霊界とこちらの世界を結びつける役割を買つて出たのだ。

その精霊王ロディステイの娘が守護精霊を授からなかったのは、  
アディスラーンにとっては不思議な事だ。

同じ一族の者はその力の強弱はあれども必ず守護精霊を持つのが  
普通の事だったから。

「もしかしたら方法が間違つてるんじゃないかって、たまに思うの  
と、ファランシアが少し言いにくそうに告げる。

「方法？」

繰り返されて、少女は言つべきか言わざるべきか、悩む。

間違つているなら、できるだけ早くにその間違いを訂正しておき  
たい。だが、その方法をここで示すには勇気が必要だった。

「あのね。お母様は、精霊魔法の使い方までご存知じゃなかったと  
思いますの。でも、精霊の力を借りたいのなら、多分これが一番有  
効だつて」

アディスラーンとユートが不思議そうにファランシアを見つめて  
いる。

仕方なく、少女は覚悟を決めた。

両手を両脇に置き、睨むように、中空を見つめる。

「ロイ、力を貸しなさい。わたくしの言うことが聞けないの？」  
アディスラーンが吹き出した。

「だから、やりたくなかったんですわ」

くるりとそっぽを向き、「お母様の嘘つき」と呟く少女。

「いや、違うと言いつれ切れないのだけど。聞いていた通りの人だなと思つて」

幼い頃、大好きだった叔母が聞かせてくれた話の中に、エリユーゼイアは何度も登場した。

「そりゃあ、あの娘はミアナ以外の連中は、友達とも仲間とも思つてなかつたんじゃないかしら。シェイは女の敵だし、ロイは便利屋だし」

叔母　叔母上と呼ばれるのを本人が嫌がつていたので、彼女の事はルディアナと、名前で呼んでいた。ルディアナは語ってくれた。『暁の剣士』と呼ばれた賞金稼ぎの話、彼らと深く関わったアトレーヌ神殿の巫女エリユーゼイアと彼女の弟のロディステイの話、彼らの冒険譚を。

「あの子がロイと結婚するとしたら、きつと『おなさけ』ね。それ以外は有り得ないと思つわ」

そう言つて、叔母は笑つた。心から楽しげな笑顔だった。

『暁の剣士』とエリユーゼイア、ロディステイ叔父。

どんな人達だったのだろう。自然、アディラーンの想像は膨らむ。邪神に追われるようにコルノスを離れた彼らは、『暁の剣士』たちの故郷であるレイスタで力を蓄えた後に、シルノアに　邪神との決戦の地に向かい、消息を絶つたという。

ルディアナ叔母も、「自分出来る事をやる」と言い残して旅立つた。

「ロディステイ様が魔法を使えなかつたのは、守護石を持たなかつたせいだと聞いた」

そう言つてアディスラーンが取り出したのは、光の加減で虹色に輝く親指ほどの大きさの石だった。

「守護石つて、これ？」

と、ファランシアも衣服の下から小さなペンダントを取り出す。

アデイスラーンは頷いた。

「僕らが守護石を手にする方法は、色々ある。手に持って生まれる者も居るし、いつの間にか側にある事もある。ロディステイ様は、それを精霊界に忘れて生まれたんだ」

それを手に入れる為に、彼は兄姉の協力を得て「精霊の門」を開いた。そうやって手に入れた力をファランシアに残したにもかかわらず、彼女に精霊魔法が使えないのがアデイスラーンには不思議だったのだ。

「でも、ラーン。違う系統の魔法を習得出来たのは『予知者』レイン・ナシユアズだけだって言っていたよね」

ユートが、昨日の授業のメモを見返ししながら質問する。

貴族の子弟に相応しく、アデイスラーンは博学だ。それが現在に必要な知識かどうかは別の話だが。

『賢者』とはラ・ナ・レーンに選ばれし者。彼の言葉を聞き、それを人々に伝える役目を担っている。

額に月桂樹を象ったの冠を頂く者。様々な力を持つとされている者。

賢者ナシユアズ。

彼は神聖魔法の使い手でありながら、未来予知の魔法を習得することが出来た。そして故国シルノアの滅亡を予言した為に、生涯を獄中で終えた、悲劇の賢者である。

彼の予言は当たらなかつた。大陸最古の国シルノアは、彼が予言した年よりも八年も早くに大陸から姿を消した。

邪神の降臨によって。

「ああ、シアなら使えるかもしれないと思っただけだよ。シアは、その石の中に何かが見えるかい？」

手にしたペンダントをじっと見つめるファランシア。眉を寄せてしばらく凝視していたが、やがて疲れたように目をそらす。

「何だか目がちかちかして来ましたわ」

アデイスラーンは軽く笑う。

「フアランシアは自分のように生まれた時から精霊と交流していたわけではない。いきなりその姿を捕らえろと言われても酷だろう。」

「焦ることはないよ。まずは立派な巫女になるんだらう？」

「ええ、がんばりますわ」

と、同じようにシアのペンダントに注視していたユートが何かを呟いた。

「え？」

聞き返すアデイスラーンに、少年が繰り返す。

「水の力を感じる」

「ユート。君、精霊力が解るのか？」

精霊力と言われてもぴんと来ないのか、ユートは小さく首を傾げる。

「アデイスラーンには、炎と風と大地の力を感じる。それが精霊力なの？」

「おどろいたな」と、アデイスラーンは額を押さえた。

未登録の妖術使いだと聞いていたので、魔力がある事ぐらいは知っていたが、精霊使いでもなく、魔法の教えも受けず、精霊力を分析できるとは思わなかった。

「アメリカーナが教えてくれたんだ。これが精霊の持つ世界を支える力だって」

その返事は、アデイスラーンを更に驚愕させた。

アメリカーナとは、ユートが飼っている栗鼠の名だ。否、ただの栗鼠でないことは、アデイスラーンも気づいていた。精霊は「気」の流れに敏感だ。アデイスラーンの中に居る守護精霊も、例外ではない。

精霊は、彼に告げた。あの栗鼠から発せられているのは、魔力だと。

と、なれば結論は一つしかない。

魔道師によって召喚された、使い魔。

使い魔の召喚は、誰にでも出来るものではない。だから、ユート誰かに師事を受けた事があるのだと、そう思っていた。その魔道師がユートに使い魔を預けたのだろうと。

現に、ユートは飲み込みが早い。誰の手ほどきも受けてないとは思えない。

だが、それが使い魔によるものだとはいえられない。有り得ないのだ。

「教えてくれる？ 使い魔が？ 馬鹿な」  
アデイスラーンは、愕然と呟いた。

本来、使い魔には自我や知性はない。主人の意志に従う人形のようなものである。主人にすら使いこなせない魔法を、主人に教えるなどという話は、聞いたことがない。

ユートの勘違いとしか思えない。

「アメリカが側にいると、時々頭の中に誰かの姿が見えるんだ。長い髪の男の人。その人がするようにしたら、魔法が使えるんだ」

「待て、それは」

アデイスラーンは立ち上がった。知らず、腰が引けている。

「有り得ない」

「本当だよ。『転移』も『魔法の矢』も、アメリカが教えてくれたんだ」

ユートは、無邪気に栗鼠を撫でている。

アデイスラーンの全身に、戦慄が走った。

古代に関する知識は、十年ほど前までは魔道の塔の禁忌として塔に所属する者以外は知りようもなかった。

だが、どんな時代にも情報収集に長けた人間というものがいて

たまたま、アデイスラーンの身近にいて

ルディアナは、アデイスラーンが望むままに自分の知る知識を授けてくれた。

だから、知っている。

『転移』は、古代魔道の中でもかなり高度な術だ。いや、『魔道

の塔』に属さない者に、使える筈がないものだ。

肉体を一度消滅させ、離れた場所で再構成する。言葉で言うのは簡単だ。実際、伝説の古代の魔道師は比較的簡単にそれを行っていたらしい。

が、それは伝説の古代 世界中に、魔力の源が溢れていたと言われる時代の話だ。今、世界に満ちているのはラ・ナ・レーンの聖なる力、そして邪神ミゲルの暗黒の力なのだ。肉体を失い、無防備になった精神は、神の力の前に破壊されてしまう。その為、魔道師たちは一度『魔道の塔』に据えられた魔石に精神を移動させ、そこに蓄えられた魔力を使って新たに肉体を再構成するという方法を取っていたという。

故に、『魔道の塔』に属さない者は『転移』を行うことが出来ない。それが、アデイスラーンの知識だった。

少年には、それらの知識がない。自分の中に秘められた力がどれ程のものかということも、知らない。

そもそも、このアメリカーナと名付けられた栗鼠は何だ？ 魔道師の使い魔であることは事実だ。ならば、本来の主人の意志をユートに伝えているのか？ 誰が？ 何の為に？

待て、ルディアナが言っていた「奴」の使い魔。あれはなんという名だった？

「どうしたの？ ラーン」

少年の琥珀の瞳が、アデイスラーンを覗き込む。陰りのない、素直な瞳だ。

「邪悪である筈がない。

「少し、休憩しよう」

アデイスラーンの声は、僅かに震えていた。怪訝な眼差しを送る。フランシアとユートを尻目に、小走りに館に戻る。

館の、やや奥まった暗い部屋。彼らがここに移ってから、ネイルの私室となっている部屋に。

「いかがですか？ 魔法の勉強とやらは」

ただならぬ形相で駆け込んで来たアディスラーンに、ネイルは興味なさそうな一瞥を向けただけだった。

「フアランシアは、問題ありません。しかし、ユートは……」

言いかけて、アディスラーンは口ごもった。ネイルにどのように伝えればいいのか、頭の中で整理する。

が、その必要はなかった。

「危険だと、申し上げた筈だ。アディスラーン様」

静かな声が、告げる。

かつと、アディスラーンの頭に血が上った。

最初から、解っていたのだ。この男は。ユートの異常な力のこと、それに気づいた自分がこの部屋を訪れることも。

「知って、おられたのか？」

聞き取りにくい、押し殺したような声がアディスラーンの口をついた。

「この眼で見ました。あれが『転移』を行う所を」

対するネイルの声には、何の感情も浮かんでいない。

「あの力は、異常です。世界の法則から外れている。あれ自身が言ったように、『魔道の塔』に引き取ってもらうのが一番良いのだろう。もつとも、今すぐというわけには行かないが」

黒い眸がアディスラーンから逸らされる。

話は終わったというように。お前に出来ることは何もない。最初からなかったのだと告げるように。

「それだけじゃない。アメリカーナは、カル・フランスの使い魔だ」  
アディスラーンの声は、震えていた。

カル・フランス。叔母の話に登場した、魔道師。『暁の剣士』

セテイの両親が賞金稼ぎだった頃、共に冒険を重ねた人物だ。

ほう、と、ネイルは再び顔を上げる。

「ご存知でしたか。あの魔道師の名を」

ネイルの声音には、僅かな変化が感じ取れた。黒い眸が、興味深

げに細められる。

それは、一瞬のことではあったが。

「つまり、あなたもご存知だったわけですね。ネイル殿」

アディスラーンの脳裏に、話し好きの叔母の様子が蘇る。

あの感情豊かな叔母がその男のことを語る時に見せた、凍りついた表情。

「カル・フランス。上級第二位魔道師　ル・シエルの称号を持つ者。そして十三年前に、邪神の『器』にされた者」

ネイルの淡々とした声が、アディスラーンを追憶から引き戻す。

十三年前の『聖戦』。二年に渡る人間と邪神の戦いは、そこから始まった。

カル・フランス。類い稀な力を持つがゆえに、邪神に乗っ取られた魔道師。肉体に邪神を宿した彼が最初に行ったのが、彼と彼の友人達の故郷でもあるコルノスの蹂躪だった。

先ずアトレーヌ神殿が。そしてフィルサーナ伯爵の守る『精霊の門』が、アザーンにある『魔道の塔』の施設が。彼のゆかりのもの、邪神の障害になり得るものが、順に叩き潰された。

もつとも、最初に邪神を宿した魔道師の名を知る者は少ない。その直後、大陸最古の大国シルノアに現れた邪神は、既に別の肉体を手に入れていた。

闇色の髪と闇色の瞳を持つ、端正な青年。

黒い悪魔の、伝説の通りの姿で。

「あの男とは、面識がある。邪神の『器』になる前に」

大陸に住まう全ての者にとって、決して許すことの出来ない大罪を犯した者のことを語るのに、ネイルは特に何の感慨も感じないようだ。

いつものことだと、マーシイならばそう言っただろう。そして、気づいただろう。今日のネイルが、いつになく饒舌なことに。それでいて、結論を口にしていないことに。

アディスラーンを試しているのだと、マーシイならば気づいただ

ろう。

「教えて下さい。その魔道師の使い魔が、何故ユートの元にいるのです。あの邪悪な魔道師とユートとの関係は？」

ユートは、その魔道師に操られているのではないのか。カル・フランスと同じように眠れる邪神の『器』にされつつあるのではないか。アデイスラーンは、そう危惧する。

「多分、彼は死んでいると、リヒトが言っていた」

言いながら、ネイルは拳ほどの大きさの黒い石を取り出した。

「リヒトは俺の義理の弟で、あいつの家系は代々祭祀をしていた。

リヒトも跡を継ぎ、竜王の封印とこの石を守っていた」

「それは？」

黒い石からは何の力も感じない。だが、彼を取り巻く精霊がひどくざわめいている。

「魔石だと、あの男は言っていたな。あの男は邪神を宿す前、これをリヒトに預けていた。レイスタでその石に触れる事が出来たのが祭祀であるリヒトだけだったからだ。そしてこの石から光が消えた頃にあの使い魔は、ユートの前に現れた」

ネイルの双眸が、アデイスラーンを捕らえている。底知れない、暗い深淵に捕らわれる恐怖が、藍の瞳の青年の中に沸き起こった。

「憶測を口にするのは、私の信念から外れるのだが」

その声は、闇の中に響き渡った。

「ユートは、カル・フランスの力を受け継いでいる。私はそう考えている」

この男は、どこに感情を置き忘れて来たのだろうか。

ふとそう考える自分を、おかしく思う。

何者をして、この男を動じさせることは、出来ないのだろうか？ 神も邪神も、彼にとっては意味のないものなのか？

ならば何故、彼は子供達を自分の手元に置くのだろうか。

何の目的があつて、彼らをここまで導いたのだろうか。

「何故、あの子を手元に置くのです？」

その時アデイスラーンの口をついたのは、彼の本音だったのだらう。

危険と解っている者を、なぜ側に置くのか。放り出してしまえば、いや、いつそのこと後腐れなく。

その思いは、アデイスラーンを愕然とさせた。自らの、心の闇に初めて気づいた。

『しるし』を持つ者。人々の希望。その一人である筈の自分が今、何を考えた？

少年のまつすぐな瞳が脳裏に蘇る。

ユートには罪はない。それにあの子は邪悪ではない。どんな力を受け継いでいようと、あの子は決して邪悪には染まらない。

だが。

心の闇は、彼の恐怖をあばき出す。

ユートは知らない。自分の力の恐ろしさを。それを知ってしまった時、それが自由に使いこなせるようになった時、少年は今のままでいられるのだろうか？

ネイルは、黙っていた。黙って、アデイスラーンの葛藤を見つめていた。その、全てを見透かす黒い瞳で。

「邪悪な魔道師」

どれほどの時間が流れたのだろう。やがて、静かな声がアデイスラーンの耳を打った。

「先程、あなたはそう言った。だが、私はそうは思わない。彼は決して邪悪ではなかった」

藍の瞳が、ネイルを伺う。

「何故、そう言い切れるのですか？」

「前にも言った。眼で見たものは、信じることにしていると」

ネイルは告げる。無感動に。

「私は、印象などには惑わされない。一時の感傷に目を塞がれることもない。彼と実際に会い、会話した私だから言えるのだ。彼の本質は、邪悪ではなかった」

そつだ。ネイルはこの間も同じことを言った。

ファランシアが、「何故精霊王の存在を信じるのか？」と問うた時に。

「常に物事の本質を見抜ける者。それが、レイスタの『識者』……」  
アデイスラーンは、呟く。

光に眼を眩ませられることもない。闇に心を惑わされることもない。

初めて、ネイルという人間が解ったような気がした。

何者にも惑わされない。実際にそれを見て、本質を読みとる。もしくは嗅ぎ分けるのか？

「だから、なのか」

ネイルが訝しげな視線を精霊使いの少年に向ける。

彼が子供達に厳しい言葉しかかけない理由。それなのに、実は放置している現実。

神の力も聖女の慈愛の力も幻想だと言い切った、彼の本心。

子供達に、盲目的に突き進むのではなく『しるし』を与えられた本当の意味を考えると、そう言いたいのではないのだろうか、アデイスラーンは思う。

「マーシイたちにとって、あなたがかけがえのない人なのですね」

「やめてくれ。餓鬼どもはまとめて面倒を見ると約束しただけだ」  
そう言つて、ネイルは小さく笑った。

「どちらにしる、俺には魔法の事は解らない。ユートを、あなたは  
どうする？」

ネイルのように見ただけで物事の本質を読みとる力は、アデイスラーンにはない。だが、彼の傍らにはいつも精霊が居る。

常に本質を嗅ぎ分ける、精霊。アデイスラーンは考えに詰まった  
時にはいつも精霊の声に耳を傾けていた。

「ユートに、私の精霊を託します」

ネイルの黒い眼が僅かに細められる。

「良いのですか？ あれに更なる力を与えても？ 第一、それは明

らかに『魔道の塔』に反する行為の筈ですが」

ネイルの問いに、アデイスラーンは小さく笑った。

闇は、もう彼の側にはない。

「今、『魔道の塔』の戒律に従うことにどれほどの価値があるので  
すか？」

魔道師が魔道師として生きて行く為に、自らの権威を保つ為に『  
魔道の塔』は様々な戒律を定めた。

だが、現在の自分たちに人間が定めた戒律など、何の意味がある  
う。『しるし』を持って生まれたからには、彼らを裁くことが出来  
るのは神のみだ。

「精霊の力は必要なのです。ユート自身にも、そして私にも」

ユートの力に対する恐怖が、アデイスラーンの眼を塞いだ。大切  
なことを脳裏から消し去らせていた。

「精霊は、よこしまな者には従わない」

それは、遙かな昔に精霊王とラ・ナ・レーンとの間に交わされた、  
誓約。

精霊達は自分達の認めた精霊使いか、ラ・ナ・レーンの認めた魔  
道師にしか力を貸さない。精霊が少年を認めるならば、自分もまた  
彼を信じる事が出来る。

それがアデイスラーンの下した結論だった。

幸い、ラスタは精霊王の結界の中にある。精霊魔法を習得するに  
は、絶好の環境とも言えた。もつとも、少年に精霊魔法を授けるの  
はアデイスラーンではなく、別の人物かも知れないが。

「では、どうぞご自由に」

既に、ネイルの眼はアデイスラーンを見ていない。話は終わった  
のだ。

彼の本心は解らない。どうするべきかを、教え諭してくれたわけ  
でもない。

ただ、待っていた。アデイスラーンの結論を。

答えは自分で見つけ出さなければ意味がないのだ。

アデイスラインは、小さく目礼した。  
それをネイルは見っていないと、解ってはいたが。

## 第一章 子供達 4 (後書き)

遅々として進まないながら、第一章第四話です。

ここでは、魔法の世界を表面に出しましたが、私の拙い文章ではちやんと表現できたかどうか不安です。

これからも頑張ります。気長におつき合いです。

マーシー「くどい解説に煮詰まって、息抜きにエッセイとか書いていたくせに……」

作者「息抜きとか言っな！」

## 第一章 子供達 5 (前書き)

あまりにも話が進まないの、リハビリに短編を書いていました(ものすごく楽しかった)。

簡潔に言葉を紡ぐことを思い出したかったです(ものすごく楽しかった)。

短編を書いている間に(ものすごく楽しかったので)、こっちの世界観を取り戻せなくて苦労しました。困ったものだ。

## 第一章 子供達 5

「あんたたち、お勉強は？」

マーシイが二人の様子を見に来たのは、夕方近くになってからだ。つた。

「休憩中。ラインを待っているんだ」

随分長く待たされているらしく、ユートの声には元気がない。

「で、ラインは？」

「ネイルと一緒にではございませんこと？」

草花を編んだ花冠を仕上げながら、ファランシアが答えた。ちなみに、彼女の隣には同じものがふたつ出来上がっている。

「出来ましたわ。はいどうぞ」

出来上がったばかりの花冠をマーシイに手渡すファランシア。それを受け取り、少女の頭に乘せてやる。

「これは、マーシイにあげたのですわ」

唇を尖らせる少女に、マーシイは笑う。

「あんたの方が似合うわよ。シア」

淡い金色の髪に、桃色の可憐な花はよく映えた。質素なりをしても、ファランシアは可愛い。大人の女にはない少女の幻想的な美しさを持っている。

こうしていると、まるで花園から生まれた妖精のようだ。

そう言えば、花を愛でる余裕なんてずっとなかったっけ。

ふと、マーシイは思う。

ラストにいと 中でもこの森の中の館にいと、時間が止まっているような錯覚がある。

外界から切り離された、妖精たちの花園の中にあるような。

「そう言えば、セティはどうしましたの？」

ファランシアの言葉にマーシイは現実に戻る。自分たちにはすべきことがある。いつまでも妖精の花園で遊んでいるわけにはいかな

いのだ。

「一緒に様子を見に行こうって言ったんだけどね。あの子、お勉強は嫌いだから」

マーシイは、苦笑する。

「俺には、関係ねーよ」。そっけなく言って、少年は黙々と稽古を続けていた。

この向上心を他のことにも向けられればいいのにと、思う。それとも単に拗ねているだけかな？

物心ついた頃から、三人は一緒だった。それが昨日から始まったアディスラーンの勉強会のせいで、二人が遠ざかってしまったように感じたのかも知れない。

「そうそう勉強に一段落ついたら夕食の支度にかかるから、ちゃんと戻っていらっしやいよ」

「お食事ですか」

ファランシアがどこか含みのある声を上げ、ユートと目を見交わす。

ファランシアは「また、あれですか？」とは言わなかった。「不味いとかって言ってるわけじゃないよ」などと答えて、ユートが墓穴を掘ることもなかった。

子供達にとって料理の内容よりも食事抜きの方が、ずっと辛いのだ。

だから、ユートは別の言葉を口にした。

「まだ、帰って来ないんだね。ラーンのお母さん」

ちゃんとした食事を提供してくれる女性の帰還を　　マーシイに気付かれないように、待ち望む。

マーシイは、料理が特別に下手というわけではない。それ以前の問題だと子供達は思う。

献立を考える文化がないのだ。

食事と言えば、朝食と昼食は小麦粉を薄く焼いた生地で何かが巻いてあるもの　　チーズやベーコンであればいいないつもユート

は思っていた。いや、贅沢は言わない。中身がないなら生地だけでも食べられる。それでは栄養が足りないからと幼虫を焼いて巻いたのはマーシィだ。

あれだけは二度と食べたくない。

夕食は雑穀と干し肉や野菜で雑炊を作る。味付けは簡単な塩味で、たまにバターが入っていると馳走だと思っていた。

旅の間と違って、材料はある筈だ。調味料も揃っている。

無いのは、マーシィの料理経験だ。

もちろん物心ついた時から旅をしていた子供達にそのような知識があるわけなく、今まではそれが普通だと思っていた。

マーシィが作ったもの以外のものは、屋台で売ってるものしか食べることがなかったから。

クリスティナの作った肉と野菜の煮物を食べたマーシィが「すごい久しぶり。まともな食事だ」と感激した時、子供達は今まで自分たちが食べていたものが、まともな食事ではなかった事を初めて知った。

「遅いなあ」

「そうですわね」

子供達は、顔を見合わせて嘆息した。

彼らがラストに滞在する事を決めてから、今日で十二日目を数える。アディスラーンの母、クリスティナが出かけたのは九日前。彼女は十日以内に帰って来ると言って、館を出た。

クリスティナは、何があっても手にいれなければならぬものがこの街にあると言っていた。それが何なのかは、アディスラーンも知らされていないなかったらしいが。

「あら、帰って来たみたいよ」

マーシィの言葉に、二人の顔がぱつと輝いた。

「お帰り。ラーン」

そして、失望に煙る。

「どうかなさいましたの？ わたくし、心配していましたのよ」

ファランシアが、本当に心配そうに眉を寄せながらアディスラインを迎える。頭上の花冠がそれを裏切っていたが。

「ネイル殿に相談があったただけだよ。悪かったね、放っておいて」  
アディスラインは優しく微笑み、小さな従妹の髪を撫ぜる。

そして、懐から虹色に輝く親指の先ほどの大きさの石を取り出した。

「ユート、しばらくの間これを預けておくよ」

石を差し出され、ユートは戸惑ったようだ。石とアディスラインを交互に見交わす。

「だって、それってラインの大切なものなんだろう？」

「確かにこれは私の守護石だけど、私には守護精霊がついていくれるからね。今は君の方が必要だと思った」

そう言っただけで石をユートに握らせる、アディスライン。

「待つて」と、ファランシアが自分のペンダントを外す。

「だったらこれを。ユートの方がちゃんと使えるみたいですよ」  
ファランシアには精霊の姿は見えないし、力を感じることも出来ない。だがユートはいとも簡単にそこに力を感じる事が出来た。

父から預かった父の守護石。それは誰が持つのが一番良いのか。花冠を編んでいる間、ファランシアはずっと考えていたのだ。

「でも、お父さんの形見なんだろう？」

「ますます当惑するユートに、」

「わたくしのお父様は死んでいません」

と、ファランシアがきっぱりと言う。

ファランシアの父親、ロディステイは聖戦の折りに肉体を捨てて精霊界に入った。父親とは二度と会うことは出来ないが、決して死んだわけではないのだと、今でも精霊界で自分達を見守ってくれているとファランシアは信じている。

「貸すだけですわ。わたくしがちゃんと精霊魔法を使えるまで」

「解った。ありがとう。シア」

受け取ったユートの手の中で、石は青く輝いている。それを見な

がらマーシィが小さく首をかしげた。

三人の間で何があったのかは知らないが、どうもアディスラーンの様子が少しおかしい気がしたのだ。

「でも、どうしてユートに？」

「ユートには、精霊魔法を覚えてもらおうと思う。許可は取って来た」

アディスラーンの言葉に、マーシィは少しだけ眉を寄せる。

これで、二度目だ。彼の意見が取り入れられたのは。

ネイルは、ちよつとやそつとのことでは決して承諾しない。マーシィの言うことなど、本気で聞きもしないのに。

「ネイルは、あなたの言葉は聞いてくれるのね」。口から出かけた言葉を、危うい所で飲み込む。

「良かったじゃない、ユート」

何とか笑顔を作ることには成功したが、どうしてもアディスラーンの顔を見ることは出来なかった。

「じゃあ、僕も少しは役に立てるようになるのかな」

セティやフアランシアに比べると感情が乏しいように思える少年の心底嬉しげな笑顔に、マーシィは救われる。

そう、アディスラーンにはこの子たちに教え、導く力があるのだ。自分には無い力。それを持つアディスラーンが加わった事は、頼もしく思つて良い筈だった。

「今は、まだそういう事を考える以前の段階だな」

背後でアディスラーンそう答える。その口調は、苦笑しているようだ。

「私の使う精霊魔法と魔道師が使うの精霊魔法とは質が違う。先ずは、ユートが精霊に認めてもらえるかどうかだ」

「違つつて、どう違うの？」

反射的に、マーシィが問い返す。

止せば良かったと口に出してから思ったので、

「あ、出来るだけ、簡潔にね」

と、慌てて付け加える。

マーシイの持つ魔法や精霊に関する知識は、エリユーゼイアから授けられたものだ。

だが、エリユーゼイアはおしゃべりは好きだったが、物事を他人に教えるのはあまり得意ではなかった。考えたことを頭の中で整理せずに、口に出す。結果、何を言いたかったのかが最終的には自分でもよく解らなくなるタイプの人間だった。

自分でも解らない説明が、他人に理解出来るわけがない。それが繰り返されるうちに、マーシイにとって魔法は苦手なものとなっていた。

「簡単に言えば……そうだな」

アデイスラーンは、少し考える。

「魔道師はラ・ナ・レーンと精霊王との盟約により、精霊を支配する。精霊使いは生まれながらに精霊の力を借りることが出来る者。当然、魔法の在り方も変わって来る」

これ以上にならないような簡潔な答えだった。少しほっとして、マーシイは更なる疑問を投げかけた。

「盟約って？」

「それは、説明すると少し長くなるな」

今度ばかりはアデイスラーンも困ったようだ。変わって、ユートが口を挟んだ。

「大昔はね、世界中に魔力の源が溢れていたんだよ。でも、それは『サラシャンテ』によって失われたんだ」

手にした紙の束をめくり、少年は小さく頷いた。どうやら、昨日習ったばかりの話らしい。

だが、その話ならマーシイも知っている。吟遊詩人に語り継がれるお伽噺だ。

ラ・ナ・レーンが生まれる以前から、世界は存在していた。それが『サラシャンテ』 昔の言葉で、世界を崩壊させる何かの要因を意味しているらしい の訪れによって崩壊した。

伝説の古代については、聖地ラ・ヤルーンでは様々な秘伝が残されている。だが、少なくともマーシイはそんなことは知らない。古代代の『サラシャンテ』だのは、マーシイにとってただのお伽噺に過ぎなかった。

「そして、ラ・ナ・レーンが世界を再生したんでしょ？ 世界中に聖なる力を満たして」

笑うマーシイに、アディスラーンが小さく嘆息した。

「笑い事ではないんだ。魔力が失われた世界に、精霊は存在するところが出来ないのだから」

人間は生きる為に食事を取る。草花でさえ呼吸し、水分を取る。それと同じように、精霊には存在する為に魔力が必要だった。

大地に、天空に、水中に、かつて魔力は満ちていた。

「魔力が失われることに、精霊はいち早く気づいた。そして精霊界へと続く門を開き、この世界から姿を消した。世界と共に消滅することを、彼らは潔しとはしなかったんだ。だが、失われる世界に残った精霊も多い。扉をくぐる力を持たなかった者、人間に束縛されていた者。あるいは、この世界をそれでも愛した者たち」

「すぐく長い話になりそうな気がした。周囲を見回すとフアランシアもユートも、妙な顔で話に聞き入っている。」

「残された精霊達が、消えることはなかったが、それ以上に過酷な運命が彼らを待ち受けていた。失われて行く魔力に代わって、世界はラ・ナ・レーンの力で満たされた。だが、精霊界に戻った精霊達がこちらに来る事は無かった」

「淡々と、アディスラーンが告げる。」

その語り口は、まるでその場を見ていたかのようなのだ。

「どうして？ ラ・ナ・レーンによって、世界は救われたんでしょ？」

マーシイの疑問に、アディスラーンは答えなかった。藍色の瞳が、促すように子供達を伺う。小さく頷き、先ずフアランシアが立ち上がった。

「力が、強すぎたのですわ。ラ・ナ・レーンの聖なる力　ええと、再生する力ですわね？　その輝きは、精霊たちには強すぎましたの。精霊界に戻った精霊たちは門を閉ざしてしまい、僅かに残っていた精霊たちは逃げ場を失って、陰に潜むようになりました」

時々、宙を見ながら告げる。本当は手にした紙片を見たいのだから。

「だが、光が強ければ闇も更に深くなる」

アデイスラインがそう言って頷いたので、ほっとしたように腰を降ろしたフアランシアに変わり、今度はユートが立ち上がった。

「邪神ミゲルが生まれたんだよ。聖なる光を恐れた精霊たちは、生き残る為に暗黒の力を受け入れてしまったんだ。そして邪神は、自分に従った精霊たちに邪悪な肉体を与えたんだ。それが『妖魔』なんだよ」

ユートの眉がきつく寄せられているのは、内容の苛酷さの為ばかりではないだろう。

「妖魔は暗黒の力で精霊界を滅ぼそうとしました。自分たちを見捨てた仲間に復讐しようとしたのですわ。それが、『聖戦』の始まりです」

「でも、この世界を愛してこの世界に残っていた精霊は、生きていたんだ。精霊界へと通じる道をもう一度繋げて、精霊界を救うことが出来る精霊は、ラ・ナ・レーンによって人間の中に隠されていたんだ」

代わる代わる説明を続ける二人は同時にアデイスラインを伺い、告げた。

「それが、精霊王フィルサーナ」

「精霊王はラ・ナ・レーンの協力により精霊界を守りました」

「そしてラ・ナ・レーンは精霊王の協力で、邪神を地の果てに封じる事ができたんだ」

「精霊たちはラ・ナ・レーンの聖なる力を受け入れることが出来るようになりました。そして精霊王は、ラ・ナ・レーンに約束したの

ですわ。人間が邪悪に染まらない限り、精霊は人間に力を与えると」  
最後は、ファランシアが締めくくった。マーシイは、小さく嘆息する。

「賢くなつたわねえ、二人とも」

何となく置いてけぼりを食ってしまったような、複雑な気分だ。

「それが、盟約？」

「そう。ラ・ナ・レーンと精霊王との盟約は、『神の言葉』で交わされた。だから、神の言葉を知らない人達には魔法は使えない。魔道師が魔法を使う時、印を結ぶだろう？ あれが、神の文字だ。魔道師は神と精霊王との盟約に基づき、精霊を支配する。そういう意味がある……らしい」

最後には言葉を濁すアデイスラーン。彼は魔道師ではないので、はっきりした事は解らないのだろうとマーシイは漠然とそう考えた。「でも、どうして魔道師なの？ 神官じゃなくて？」

神の盟約により精霊を支配出来る力は、むしろ神官に与えられるべきではないのか。

少なくとも、マーシイはそう思う。

「とてもいい質問だな。それは」

アデイスラーンは、苦笑した。

「ミノアの学院でも、長年議論され続けていたそうだ。だが結局答えは出ていない。答えられるとすれば、ラ・ナ・レーン本人のみだろうと思うよ」

そもそもラ・ナ・レーンの言葉を聞くことが出来るのは、神に選ばれた『賢者』のみ。

世界に満ちる聖なる力の片鱗から神の意志を受け取るなどと言うては見ても、『神官』とはあくまで人間が人間に与える称号に過ぎない。

神の意志は、人間には理解出来ないのだ。永遠に。

「魔道師は、盟約により精霊を支配出来る。神官には出来ない。神官は神の力を行使出来る。魔道師にそれは出来ない。出来るから出

来る。出来ないから、出来ない」

「いいかげんなのね」

せつかく延々と話を聞いていたのに、最後の質問の答えは出ないのかと脱力する、マーシィ。

「でも、僕は盟約なんか知らないよ。神の文字とかも知らない」と、不安そうに告げたのはユートだ。

「ああ。ユートの場合は『精霊感知』は、解っているみたいだから『精霊支配』の魔法を覚える必要がある。残念ながら、私には教えることは出来ないけどね。だから君がその魔法を覚えるまでは、その石が力を貸してくれる筈だ」

言われて、改めてファランシアから託された石を見つめる、ユート。

「守護石には主に二つの役割があつて　ひとつは、ちょっと言えないんだ。もうひとつもあまり言いたくないんだけど」

少し意地悪く笑うアディスラーンに、

「何よそれ」

とマーシィが言うと、

「ずるい」

「ひどい」

と、ユートとファランシアも年上の少年を睨む。仕方ないなど、アディスラーンが小さく息をついた。

「精霊使いは精霊を呼び寄せ、この石の中に住まわせることが出来るんだ。石に住む精霊は守護石を持つ者の魔力で生かされる。その代わり、持ち主の意志に従って魔法を使ってくれる」

「え？」と、声を上げたのはファランシアだった。

「もしかして、わたくしの魔力でその石の精霊さんは生きていたのですか？」

「精霊は、君にとっても感謝しているよ」

と、アディスラーンは全然別の返事をする。

ファランシアから、そういう反応がありそうだからアディスラー

ンは言いたくなかったのかと、やっとマーシィは納得した。

「でも、全然役に……」

いつになく、ぼそぼそと言葉を濁すファランシア。

「わたくしが、未熟だったのでしょうか……」

「ま、まあまあ。シア」

慌ててマーシィがファランシアの肩を叩く。

「そんな、いかにも損したなっていう顔はやめようよ、ね」

言われたファランシアが取り繕うように笑みを浮かべる。

多分、「いかにも損したな」という表情を浮かべているとマーシィに指摘されたのがシヨックだったのだろう。

「今、この石に住まうのは水を司る精霊スウイナ」

仕切り直すアディスラーンの言葉に、マーシィは再び石を見つめる。が、勿論その中に精霊の姿は見いだせない。

「普通、守護石には石を持つ者本人以外には、ひとりの術者が呼んだ精霊しか住まわせる事が出来ないんだけど　この石は私を受け入れてくれているみたいだな」

ちらりとファランシアを伺う、アディスラーン。少女の目がやつと輝いた。

「呼んで下さい。わたくしも、見てみたいですわ」

ユートから石を受け取ったアディスラーンが数語、囁いた。不意に巻き起こった風が、彼を中心に小さな渦を作り出す。

「疾き者、天空を駆ける者よ。出で来れ。汝が愛し子の元に」

アディスラーンの掌の石に、緑の光彩が満ちた。緑から、水色に銀に。黄色に。徐々に移り変わり、やがて、吸い込まれるように消える。

「何て、言ったの？　最初」

あまり魔法に免疫のないマーシィが、呆然と呟いた。

呪文の詠唱のようでもあった。マーシィの知らない、どこかの国の言語のようにも聞こえた。

アディスラーンが、笑う。

「私の洗礼名だよ。アデイスラーン・デア・リユート・ウアイン・フィルサーナ。大地と風と炎の上位精霊から授けられた名前だ。ちなみに、今呼び出した風の精霊ファルルンに力を借りる時には、この名が必要になるからね」

言われてユートが慌てて書き付ける。

「ち、ちよつと待つて。アデイスラーン・デア・リユート……ウアイン？」

「そう。その名で命じれば、風ファルルンの精霊は君に力を貸してくれる」  
言つて、アデイスラーンは守護石をユートに手渡す。

ユートは、小さく頷いた。

「アデイスラーン・デア・リユート・ウアイン・フィルサーナによつて召還された者よ、僕に力を見せて」

ユートを中心に、突風が巻き起こつた。木々を揺るがす勢いにマシーは数歩、後退する。ファランシアに至つては、転んで草の中に頭を突っ込んでいる始末だ。

「ゆ・う・と。何がしたかつたんですの？」

白い顔を泥で汚したファランシアが、声音に凄みをきかせて立ち上がる。

「さつきみたいな、穏やかな風が吹くかなつて思つたんだ」

ユートもまた、呆然と座りこんでいる。

「でも、すごいわ。いきなり使えるようになるなんて。もしかして、あんたつて天才じゃない？」

「ああ。確かにそうだな」

答えたアデイスラーンの声は、どこか険しかった。

「ラーン？」

だが、マシーに呼ばれて振り返つたアデイスラーンは、既にいつもの穏やかな瞳を取り戻している。

マシーは知らない。彼とネイルとの間にあつた会話を。だから、彼の脳裏に浮かんだ祈りの言葉を知らない。

精霊よ、どうかこの子を導いて下さい。あなたたちがこの子を受

け入れる限り、私はこの子を信じます。

そんな時だ。

木々が不意にざわめいた。

アディスラインが顔を上げた。藍色の眼に鋭い気配が宿る。

「ど、どうしたの？」

ただならぬものを感じ、マーシィは声をかける。

おかしいのは、アディスラインだけではない。

森が、騒いでいる。そんな気がする。

「森に、侵入した者がいる。精霊が、騒いでいる」

「クリスティナじゃないの？」

「違う！ 君たちはそこに居てくれ」

叫ぶと同時に、アディスラインは駆け出した。慌ててマーシィがその後を追う。

そして勿論フアランシアがそれに続き、ユートも後に続いた。

セティは、苛立たしげに森を進んでいた。

ここは、近隣の者が「迷いの森」と呼んでいる場所だとアディスラインが言っていた。侵入を許された者以外が、この森に入ることには許されない。森は形を変えて侵入者を惑わす。

自分達がここで迷わずにいられるのは、アディスラインがくれた護符があるからだ。

クリスティナ アディスラインの母親が帰るまで、ここを動くわけには行かない。マーシィはそう言っていた。

柔らかな日差し。爽やかな風に、さやさやと音を立てる木々たち。

『聖戦』前までは、一般的だった風景だったとクリスティナは言っていた。

そんなもの。

少年は顔をしかめる。

ここに真実はない。時間は、決して戻ったわけではない。森の外では今も邪神に脅える者が溢れているというのに。

自分の苛立ちのゆえんを、少年は知っていた。

昨日からフアランシア達は魔法の勉強をしている。新しい力を身につける為に。

しかし自分はどうか？ マーシイと剣の稽古。今までと同じことだ。

剣を渡されてから、稽古を怠ったことはない。でも、マーシイからは一本も取れない。

マーシイは女なのに。

女なのに、剣を取った。女なのに、自分には勝てない。女なのに

あの綺麗な髪を切り捨てた。

苛々する。クリステイナはまだ帰らない。まだ、このいまいまい森を出られない。

アデイスラーンには力がある。

年上の少年からもらった護符を、セティはそつと取り出す。

小さな木彫りの腕輪。繊細な彫刻の中には、文字が隠されているという。その文字すら、読むことは出来ない自分。

腹立たしいのは、そこだ。

ラーンは、こんなちっぽけなもので自分たちを守ってくれる。その力を持っている。

それだけで、マーシイを支えてやる事が出来るんだ。

ずっと欲しかった、力。それを最初から持っている、ラーン。それを思うだけで苛々する。

気がつけば、いつの間にか森の入り口についていた。

マーシイは言った。決して森を出てはならない、と。散歩はかまわれないが食事の時間までには戻るように、と。

セティは西の空を見る。ここからでは木々に隠されて太陽は見えない。しかし、夕餉までにはまだ時間がある筈だ。

ほんの少し、様子を見るだけだ。街に行くわけではない。自分にそう言い聞かせて、足を踏み出す。

そこで少年が見たのは、一人の老婆。手には光り輝く剣が握られている。

「精霊よ」

老婆は、森の入り口まで来ると息を整え、剣を掲げた。

「どうか、導いておくれ。アディススラーン様の元へ」

剣が、輝いた。木々が道を開ける。

何者だ？

腰の剣を掴みながら、少年は老婆を睨む。

マーシイは、あの雑貨屋の老婆の話をお供達には伝えなかった。

だからセティにはこの老婆が敵なのかそうでないかを、見分けることができないでいた。

セティが逡巡している間に、老婆は恐る恐る足を踏み出す。老婆の背後で、緑の暗幕が再び閉ざされる。

取りあえず放つてはおけないよな。

剣を構え老婆の前に立ちはだかろうとした、その時。

「逃げられると、思っていたのか？」

不意に、声が響いた。

一人の人間が数メートル上空から老婆を睨みつけている。

何かの魔法を使用しているのだ。アディススラーンがここにいれば、風の上位精霊魔法だと教えてくれただろう。

豊富な肢体に黒い衣を纏った、女。しかしその顔は人間のものはなかった。

青白くぬめぬめとした肌。赤く輝く眼。そして額に生えた、一本の角。

仮面だと、セティは気づいた。

黒い鎧の悪魔。一瞬、そう思った。だがセティの知る「子供狩り」は、肉体のない黒い全身鎧の姿だったはずだ。少なくともその人物には肉体があり、身に纏うものも金属鎧ではない。

「その剣を、渡してもらおう」

女が、老婆に詰め寄る。老婆は動けない。

「この剣はお前さんには使えない。正当な持ち主だけが、この剣の力を打ち奮うことができるんだよ」

老婆が言い終えるのを、女は待っていないかった。

老婆の元に舞い降りると、手にした剣を振るう。

無意識に身体が動いた。老婆の前に立ち、女の剣を受け止める。

「てめえ、何者だ！」

無造作に奮われた剣には、たいした威力はなかった。だが、剣を受けた瞬間、セテイの内に動揺が走る。

それは、恐怖だ。だが何に対する恐怖なのかは、少年自身解ってはいない。

「人に名を聞くのなら」

女は、冷たく笑った。

「先に名乗れ。小僧」

「セテイ。レイスタの戦士だ」

少年の名乗りは、女に何の感銘を与えることも出来なかった。

「フィルサーナの小倅の手下か？」

女がふんと鼻を鳴らす。

かっとなが上る。苛立ちが少年を普段以上に短気にしていた。

「俺は、誰の手下でもねえよっ」

言つと同時に、剣を振るう。だが、それは女の剣に簡単にはじかれた。

「多少は、腕に自信があるようだな。だが」

女が、笑った。

「カゾスよ、私に力を貸せ」

女の掌から、炎が迸る。それはセテイを直撃した。

熱いと思った後で、肉が焦げる臭いがした。

激しい痛みに襲われたのは、その後だ。

炎は、少年を殺さなかった。それがラ・ナ・レーンの加護なのか、それとも女が手心を加えたからなのかは解らない。どちらにせよ、全身に火傷を負った少年にとって、事態が好転したわけではないの

は確かだ。

「畜生……!!」

全身が、痛い。

倒れた少年を尻目に、女は腰を抜かした老婆に近づく。老婆が剣を放さずにいるのを見ると、女は何も言わずに剣を振り下ろした。

セティの耳に、老婆の悲鳴が届いた。

セティの目には右手首に巻いた赤い布が映っていた。

『どうせ、何もできないのだから』

マーシイは、いつもそう言っていた。

本当だ。俺、何も出来ない。

「小僧」

女が、そつと囁く。

「フィルサーナの小倅に伝える。精霊王の剣はこのルディアナ・ネア・カティリアが頂いたと」

「俺に命令するな」

そう言ったつもりだが、少年の口をついたのは、しゃがれた呻きに過ぎない。

全身の火傷に身動きひとつ出来ないでいる少年を、女は容赦なく足蹴にする。

「成程、確かにその必要はないようだな」

言われて、少年は火傷で張り付いた瞼をこじ開ける。

その時だ。

「セティ!」

少年の耳に、聞き慣れた声が届いたのは。

マーシイ。

来ちゃ駄目だ。

どうか、逃げて。

そう言いたいが、声が出ない。息が苦しい。

かすんだ少年の目に映ったのは、マーシイとアディスライン。後ろにはファランシアとユートもいる。

「セテイ……！」

「動くな」

駆け寄ろうとしたファランシアを、女は少年に剣をつきつける事で制止する。駆けつけた面々を興味深げに見つめていた女は、アデイスラーンの顔を見て嗤った。

「やはり、ここに潜んでいたか。フィルサーナの小倅」

「どうして……」

ファランシアの声は、掠れていた。きつと、涙ぐんでいるのだから。

「何の権利があつて、こんなことをするの？ セテイを放してください」

ファランシアが震える声で告げた。恐怖のせいではない。憤りの為だ。

そして、彼女をかばうように傍らに立つ人もまた、怒りの形相で女を睨んでいる。

「ごめん。マーシィ。」

少年は、心の中で呟く。

「ごめん、マーシィ。俺、足手まといだ。」

「どうして？」

ファランシアの言葉が、繰り返される。

「どうして、人間が人間を陥れるの？ そんなこと、ラ・ナ・レーンはお許しになりませんわ」

「黙れ」

女が、低くうなる。

「神は、我らを守ってはくれない。ならば自分の身は自分で守るしかなかるう」

「我が守護精霊！」

アデイスラーンが、叫んだ。

「堅き者。動かざる者よ。我に力を貸し与えたまえ」

少年の声に應えるように、大地が揺らぐ。

「大地を司る、ドールアよ！」  
空気が変わった。

大地が身じろぎしたかのように、唸りを上げる。

「我を守れ、精霊王の剣よ！」

女を飲み込むべき大地のうねりが、止まった。同時に、アデイスラインの動きが止まる。

魔法を封じられた困惑が、少年に失態を犯させた。彼は、剣を抜くべきだったのだ。

女の姿が宙に浮いた。

女は、まっすぐに飛ぶ。アデイスラインに向かって。

マーシイは、動かない。動けない。

「この程度、か」

剣先をアデイスラインにつきつけ、女は囁いた。

「これが、フィルサーナの直系か。伝説の十三人の勇者の力なのか

ならば、生きている価値は、ない」

全てが、ほぼ同時に行われた。

「何故、あなたが……っ」

叫ぶアデイスラインに、女は容赦なく剣を振るっ。

迸った鮮血が、マーシイの視界を赤く染めた。

「いやあっ」

フアランシアが、悲鳴を上げた。

「アメリカ！ 僕に力を貸して！」

ユートが、叫ぶ。

異なる二種類の魔力が、周囲を満たした。神聖魔法の『神の怒り』と古代魔法の『魔法の矢』が、女に襲いかかる。

怯んだ女に、マーシイの剣が振り下ろされた。とっさに、女は宙に舞っ。

セテイの身体が、突如巻き起こった風に吹き上げられた。

「無理だ、ユート！」

叫んだのは、アデイスラインだろうか？

セティに見えていたのは、同じように中空に舞い上がったユートの身体が、大地にたたきつけられる姿だった。

「その力があるならば」

女の声が、やけに遠く響く。

「この小僧を助けたければ、私の元に来い。ラ・ナ・レーンの子らよ」

セティの意識は、そこで途切れた。

## 第一章 子供達 5 (後書き)

ちよつとは話が動いたかな。

と、いうところでやっと第一章が終わりました。(多分)

まだまだ「序」の枠を出ていませんが、気長におつき合いをお願いします。

## 第二章 レジスタンス1 (前書き)

約、二ヶ月ぶりの更新になります。  
何やってたんだろうね、わたし……

## 第二章 レジスタンス1

傷ついた少年を抱えて、仮面の女は馬を下りた。

「お帰りなさいませ、姫」

出迎えたのは、顎に髭を蓄えた初老の男。

昔からこのラストに住み、領主に仕える執事だった者だ。

「ご首尾は？」

女は無言で手に入れた剣を見せる。男は「おお」と目を見張った。

「お見事でございます」

抑揚のない声で告げ、深々と頭を下げる、男。

そんな男に、女はただ冷たい一瞥を送っただけだった。

「明朝にサイラスに発つ。準備を頼む」

侍従に馬の手綱を手渡し、男の前を無言で通り過ぎる女へ、

「次は何を？」

と、執事が尋ねる。

さあと、女は告げた。

「国盗りでも、するか？」

「さすがは姫様」

やはり抑揚のない声で、男が告げる。

女は足を止め、この家の執事だった男を振り返った。

「お前、何故私を姫と呼ぶ？」

これまでに三度、その呼び方は止めると言った。それでもこの男

は女の事を「姫」と呼ぶ。

四度目は命はないと思えと言っても、この男は彼女をそう呼ぶ。

「わたくしにとりまして、あなたさまはいつまでも姫様でありま  
すから」

はじめて、男は笑った。

懐かしそうな眼差しを女に向け、ゆっくりと会釈をする。

「私は、そんなお前を黙らせたくてたまらないのにな」

乾いた声で告げる女。

「あなた様の思うままになされませ」

執事は、灰色の目でじつと女を見つめる。

だが、女の本当の表情は仮面に隠れて見えない。

唯一、表情を出す事が許された女の口元が小さくつり上がった。

「そうそう、アディスラーンは生きていたよ」

男の顔色が変わったのは、一瞬の事だった。

「裏切り者と呼ばれ、生き延びた甲斐があったな」

くすりと笑い、男に背を向ける。

「姫様、わたくしは……」

「言うな。私に従うなら、言葉ではなく態度で示せ」

取りすがろうとした男を、女は一言で黙らせる。三歩ほど足を進

めた時に、再び男は女の背中に声をかけた。

「ひとつだけ、お伺い致してよろしいか？」

何だ？ と、物憂げに聞き返す、女。

「医者は、必要ですか？」

ああ、と女は笑った。

「すぐに私の部屋に寄越してくれ」

女の腕の中の少年は、意識を取り戻す気配もない。

それ以上のことは聞かずに、男は下がる。

自室に戻ると女は初めて仮面を取った。

不思議な色合いの髪がふわりと広がる。

根本は漆黒なのに徐々に赤く色が抜けて、不思議なグラデーショ

ンを描いている髪。

それは、アディスラーンの髪とよく似ていた。

あかね色の瞳は、光の加減で赤く見える。

(泣かないで)

姿なき者の声が、女の耳に届く。

女は小さく笑った。

「泣いてなんか、いないでしょ」

（後悔していない？）

また別の声が告げる。

「後悔は、全部終わった後ですることに決めているから」

女はきつぱりと答えた。

私も、あの男と同じだから。

裏切り者と呼ばれ、それでも浅ましく生きる。

今は、まだ死ねないから。

（泣かないで）

また、声は告げる。

「馬鹿ね。泣いてないって言ってるでしょ？」

（泣かないで、傷だらけの貴女）

暴走する魔力の中で、マーシイはただ立ち尽くしていた。

ファランシアが行使した、『神の怒り』。様々な自然現象に働き

かける魔法だ。

ファランシアの魔法は雷を呼び、さらに大風を呼んだ。

彼女の心の乱れをあらわすかのように、風はなかなか止まない。

その大風の中で、マーシイは呆然と立っていた。

たった今、目で行われた数々の出来事。そこから導き出された

結論。脳裏に浮かぶひとつの事実を、言葉にするのは恐ろしかった。

だから、自ら考えることを、マーシイは禁じた。

「ファランシア、もういい」

焦点の合わない視界の片隅に、赤い色がよぎった。

アディスラーンの髪の色、そして彼の肩から腕を伝って落ちる鮮

血の色だ。

先刻、あの女に切り付けられた傷だ。心臓を貫いたように思えたのは、目の錯覚だったようだ。幸い急所からは外れているようだ、

右手で押さえた傷口からは止まる事なく血が流れ続けている。  
手当てをしなければ。ああ、でも何も持って来てないんだ。  
ぼんやりと考える。

荷物は館に置いたままだ。腰に履いた剣を除いては。いや、その  
剣も今は腰にはない。右手に、握られたままだ。

ゆっくりと、右手に目をやる。使い慣れた剣は、吸い付いたよう  
に手から離れない。

強ばった指をゆっくりと外して行くマーシイの耳に、再びアディ  
スラーンの声が届いた。

「もう、いいんだ。終わったんだよ」

終わった？ 何が？

風が、止まった。ファランシアが糸の切れた操り人形のように、  
がくりとくずおれる。覚醒したばかりの魔力に、自失状態に陥って  
いるようだ。

その後ろで、呻いているのはユート。右肩を抱えて、顔をしかめ  
ている。

女の姿はない。そして、セティも。

セティがいない。

どうして？

その言葉は、声にはならなかった。

徐々に暮れ行く森。傷ついた、仲間たち。

どうして……。

唯一無傷なのは、マーシイだけだ。しっかりしなければいけない  
のは、解っている。

でも。

声が出ない。体が動かない。

戦えない。

ネイルは、いつも言っていた。お前たちに何が出来るのか、と。

セティは答えた。力は、確かにあると。自分たちの中に 彼に

そう語ったのは、マーシイ自身ではなかったのか？

力はある。ただ、使い方を知らないだけ。

いつか立ち上がる日が来る。それまでは力を蓄えて……少しでも、強く。少しでも、前に進めるように。

それが自分たちの義務だから。

自分たちを守って、死んで行った者達への義務だから。

「どうして？」

力が足りない。

こんなにも無力な、自分。

十年前に村を焼かれて、命からがら逃げ出した。

そのことを忘れないと誓った。いつか強くなると誓ってから、既に十年になるのに。

あの頃と、何が違う？ こんなにもまだ、力が足りない。

打ちのめされて、立ちつくすマーシイの肩に触れる手があった。

「マーシイ」

振り返ると、アデイスラインが目でうながしている。そこには血にまみれた老婆の姿があった。

辛うじて息はあるものの、助からないのはマーシイの目から見ても明らかだ。

そう、こんな時も何も出来ない……。

のろのろと歩み寄るマーシイの前に立ったのは、憔悴したフアラシニアだ。

金色の髪の美しい少女は、手首に巻いた銀系の祈り紐を右手で掴み、神への祈りを捧げる。

「偉大なるラ・ナ・レーン。そのみひかり持て、あなた様の子に安らぎをお与え下さい」

老婆に触れた掌から、柔らかな光彩が溢れる。

『奇跡の光明』。癒しの効果を持つ神聖魔法だ。熟練した術者であれば、どんな怪我でも一瞬で癒すことが出来ると聞いた。だが、今のフアラシニアには、瀕死の老婆に救いをもたらすだけの効果は得られなかった。流れる血は止まったが、流れてしまったものは戻

らない。多分、老婆の命が数秒ほど長引いただけだろう。

だが、老婆にはそれで十分だったようだ。

老婆の焦点が定まり、子供達の姿を認めて彼女は微笑む。

「アデイスラーン様。そして勇者たちよ」

「どうか、ラストをお救い下さい。精霊王の剣は、あなた様の力となりましょう」

その剣が奪われてしまった事を、老婆は覚えていないようだった。老婆の手が、宙に伸ばされる。

「ラ・ナ・レーンの勇者よ。どうか、この地を見捨てられませんよう……」

勝手なことを、言わないで。

あたしたちに、すがらないで。押しつけないで。こんなに、力のないあたしたちに何が出来るといえるの？

マーシイは、そんな言葉を口にする事すら出来ずにいた。

「神は、いつでもあなたと共にある」

アデイスラーンが老婆の手を取り、告げる。

きっとこの中の誰よりも傷つき、打ちのめされている筈のアデイスラーン。だが、死に行く老婆の前でそんな様子は一切伺わせない。「私たちは、あなたのことを忘れない。あなたの願いは私たちの願いです。だからどうか、安らかな眠りを……」

彼の言葉に、老婆は安心したように笑みを浮かべた。それが、最後だった。

硝子のような眼は、既に何も映していない。

「行こう、マーシイ」

開いたままだった瞼を閉じさせ、亡骸に自分のマントをかぶせたアデイスラーンが、やがて告げる。

行ってくてどこに？ セテイが、いないのに。目の前で、人が死んだのに。

「今は、帰るんだ。ネイル殿の元に」

「……そうね」

そうだ。ネイルに報告しなければ。でも、どんな顔をして彼に会えばいいのだろう。

ぼんやりと考えながら、ユートに手を貸す。

そう。

負けたのだ。

何も出来ない。お前たちには、何の力もない。

ネイルは、いつもそう言っていた。いつか彼を見返したいと思っていた。

ネイルは、正しい。

マーシィは、唇を噛み締める。

新たな力を身につけた、フランシアとユート。自分たちの中では、最も完成されている筈のアディスラーン。

みんなが、持てる力を出し切った筈だ。それなのに 最初の目的、セテイを助けることさえも出来なかった。

そう。自分たちは、完敗したのだ。たったひとりの女に。

そっと、額に触れる。そこにはラ・ナ・レーンの勇者のしるしが刻みつけられている。しかし、神は彼女に何も語らなかった。

ネイルは、何も言わなかった。順番に傷の手当てをするから、マーシィにはお茶の用意をしておくように言いつけただけだった。

フランシアは、眠っている。その眠りが安らかなものではないことは、寝顔で解る。

館に戻った直後にフランシアは倒れた。魔法を使いすぎたからだ。アディスラーンが言っていた。左肩を脱臼していたユートも治療を終え、その傍らで船を漕いでいた。

用意しておくように言われたお茶がすっかり煮詰まった頃、マーシィの背後で扉が開く気配がある。

「怪我は、どう?」

「たいした事はないよ」

確認もせずに告げるマーシィに、アディスラーンの声が答えた。

嘘ばかり。

マーシイは思う。

あれだけの血を流しておいて、たいした事がないわけがない。

「君こそ、大丈夫なのか？」

大丈夫なわけが、ないじゃない。

反射的にそう思いながらも、マーシイが口にしたのは別の言葉だった。

「あの時、何故、剣を抜かなかったの？」

少女の声音には、非難の響きがある。

あの女が打ちかかって来た時、アディスラーンは無防備にその剣を受けた。致命傷にならなかったのは、奇跡に近い。

「戦士としては、失格だな」

そう言ってアディスラーンがマーシイの正面の椅子に腰をかける。

「その通りよ」

そんなアディスラーンとは目を合わさずに、マーシイはぶっきらぼうに答える。

でも。

彼は、立派だった。何も出来ずにいた自分よりもはるかに立派に振る舞って見せた。あの老婆の前で。

それが悔しい。自分の無力さが、何より悔しい。

「あなたは、一流の精霊使いかも知れない。でも、武器を手にして  
いるからには、戦士としての自覚が必要だと思っわ」

「私は……」

言いかけて、アディスラーンは沈黙した。やがて背後から聞こえて来たのは、全く別の言葉だった。

「あの女が持っていたのは、精霊王の剣。フィルサーナー族の至宝だ」

「だから？」

「一族の者にしか、使えない」

普通に、使っていたじゃない。

口をつきかけた言葉を押しとどめる事に、マーシイは何とか成功した。

アデイスラインが今口にしたのは、決して聞き流してはいけない事だった。

「どついう事？」

「言葉通りの意味だよ」

言った後で、言葉が足りないと思ったのだろう。

「一族の中に裏切者が、いる」

アデイスラインが、そう付け足す。

その表情は、何かに耐えているように苦しげだ。

「だから、剣を抜かなかったの？」

「君には、出来るのか。大切な人に剣を向ける事が」

そう聞かれてマーシイの脳裏に浮かぶのは、自分達を守る為に死んで行つた人たちの顔ばかり。

「あたしは……」

様々な顔が浮かんで消え、最後に黒い髪の赤ん坊の顔が浮かんだ。

マーシイは首を振って脳裏に浮かんだその映像を消す。

「あたしは、あたしに剣を向ける人には剣で対抗する。そうでなければいけないって、だってあたしは、あたしを守ってくれた人の分まで強くならなければならぬんだから」

「それは強さじゃない、無知だ」

苛立たしげに言い放つたアデイスラインは、マーシイが反論するよりも先に「ごめん」と謝る。

多分、反射的に押さえられなかった言葉なのだろう。

「君は、ネイル殿に剣を向けられるのか？」

言われて、マーシイは言葉を失った。

「ラインにとって、それほど大切な人なの？」

マーシイの声は震えていた。

心の中を垣間見られたような羞恥心が、そこにあった。

逆にアデイスラインは戸惑うように、そんなマーシイを伺う。

藍色の瞳と目があった。

思わず目をそらすマーシィ。

気づかれた。絶対に気づかれた。

ずっとずっと心の中にしまっておいた、想い。

「そうだね」

アデイスラーンは特には触れず、そつとマーシィから視線を移した。

「尊敬、していた。誰よりも」

アデイスラーンの藍色の眼は、どこか遠くを見つめていた。

きつと、遠い昔の思い出を。

そんなことを考えながら、マーシィはふつとある可能性に思い当たる。

「もしかして、あたしたちがあの場合に居合わせなければ、違う展開だった？」

もしも自分達が一緒でなければ、あの女はアデイスラーンに敵対しなかったのではないかと。

そして、アデイスラーンはあの時、マーシィたちに「来るな」と言っていた。何か予感があったのではないかと。

「それは、どちらとも言えないな」

腕組みをしながら、アデイスラーンが答える。

「解っているだろうけど、今の事態は最悪なんだ」

アデイスラーンの言いたい事は、マーシィにも解る。

もしもの可能性を考えていても仕方がない。

あの女は、マーシィたちの事を「ラ・ナ・レーンの勇者」だと呼んだ。

「ラ・ナ・レーンの子供たち」がここに居る事を知ってしまった。そして、セティはいない。

「私の事情から言っても良いかな？」

真摯な藍色の瞳に、マーシィは頷く。

「私はあの人に向ける剣を持たなかった。そして、あの方は私を殺

さなかつた」

殺すつもりなら、簡単に殺せた筈だ。

その一部始終を見たマーシイだから、そう思う。

(その力があるならば、私の元に来い)

あの女の台詞が思い出される。

「そして、私には取り戻さなければならぬものがある。だから、

私はもう一度あの人に会わなければならぬ」

アデイスラーン言葉は、マーシイが想像していた通りのものだった。

だから、マーシイは笑った。やっと笑う事ができた。

「取り戻さなきゃいけないもの、あたしにだってある事、忘れてないよね」

アデイスラーンもまた、マーシイの言葉を想像していたようだ。

困ったように苦笑している。

「ひとりでは無理な事ぐらいは解っているよ。でも 本音を言えば、君たちを巻き込みたくないんだ」

「ふたつのものを同時に取り戻すことなんか、出来ないでしょ？」

ふたりは、目を見合わせた。

黒と藍色の瞳が交錯する。

結論は、すぐに出た。

どちらもがその言葉を口に出そうとした、その瞬間。

「お前らには、無理だ」

背後から投げかけられた冷たい声が、高ぶった気持ちを一気に冷ます。

「こつも無様にやられておいて、まだ解らないのか」

振り返ると、開け放たれた戸口に、ネイルが立っていた。

そして、もうひとり。

男物の革の衣服を着た、背の高い女性。

「母上……」

と、アデイスラーンが呟く。

「クリステイナ」

マーシイも、その人の名を呼んだ。  
クリステイナ。

アディスラーンの母は、茶色の髪の落ち着いた印象の女性だ。  
鼻筋が通った東方的な顔立ちで、アディスラーンにはあまり  
ほとんど似ていない。

ややつり上がった目尻や端正な面立ちからは厳しい印象を受ける  
が、アディスラーンや子供達に向けられる瞳は、いつも優しい。

十日近く前に、彼女は「捜さなければならぬものがある」と言  
い置いて、単身どこかに向かった。

その彼女がやっと帰って来たのだ。

クリステイナの視線がアディスラーンの左肩の包帯に注がれるの  
を見て、マーシイが頭を下げる。

「ごめんなさい」

「何を謝っているの？ マーシイ」

そんなマーシイの前で腰を落とし、目線を合わせてクリステイナ  
が告げる。

白い手が、マーシイの頬を包み込んだ。

「あなたが悪いわけではないでしょ？」

でも、と言いかけて　それ以上は言葉にならず、マーシイはそ  
の女性に抱きついた。

すると、ずっと堪えていたものがあふれ出し、喉から低い嗚咽が  
漏れる。

「話は、ネイルから聞きました」

そんなマーシイの頭を撫でながら、クリステイナが告げる。

「ここに居れば大丈夫だと判断した、私の責任です」

まさか、精霊の結界が破られるとは。と、続いたクリステイナの  
言葉に、

「一族に、裏切者がいます」

アディスラーンが、きつぱりと告げる。

「裏切者」と、彼の母親が口の中で繰り返した。

そうだ、アディスラーンはさつきもそう言っていた。自分が誰よりも尊敬していた人だったと。

「それは、誰ですか？」

聞いたのは、ネイル。

「ルディアナ・ネア・カティリア……」

「そんな馬鹿な！」

アディスラーンが告げた名に、彼の母親が即座に反応する。

即座に反応できたということは、彼女もその可能性を心のどこかで考えていたのだろう。

「私の叔母で、師でもある人です。この地であれだけの力が使えるのは、あの女性ひつこしかいない」

淡々と告げる、アディスラーン。多分、母親ではなくネイルに聞かせているのだろうと、マーシイは思った。

「なんてこと」

クリステイナは額を抑え、呆然と立ちつくしている。

そんなクリステイナに椅子を勧め、マーシイは煮詰まったお茶を捨てて入れなおす事にした。

長い、深刻な話になりそうだから。

「わたくしは」

湯気の立つカップがそれぞれの前に並ぶと、クリステイナが重い口を開いた。

「『精霊王の剣』を捜すために、この国に戻って来ました」

「今日まで、どこへ？」

尋ねたのは、ネイル。

クリステイナは皆を見回し、告げる。

「首都、サイラスに。かつてフィルサーナ伯爵が剣を託したレジスタンスを捜していました。そこで噂を耳にしたのです。かつて私たちフィルサーナ子爵家を裏切ったラスタの施政者が、何者かに倒さ

れたと。それを聞いて、姫……ルディアナ様がお帰りになられた可能性を考えました」

そこで一度言葉を切り、クリステイナが再び皆を見回す。

だが、彼女に質問をする者はなく、マーシイとしては、聞いたことは色々あったのだが、それを上手に口に出せないでいたクリステイナは、言葉を続けた。

「サイラスで『剣』は見つからなかった。もしかしたら、同じ事を考えた者がラストに持ち込んだのやもと思い、慌てて戻ったのですが、遅すぎた」

唇を噛みしめる、クリステイナ。

「取り戻します」

即答したのは、アディスラーン。

「ルディアナ様が敵に回ったのなら、なおさらあの剣は取り戻さなければならぬ。勿論、セテイも」

「あたしも行く」

間髪をおかずにマーシイも告げる。

それに対して、ネイルが何かを言うより早く。

「新たな賢者が生まれたそうです」

今までの流れと全く関連のない事を、クリステイナが口にした。

「そしてその賢者は、数人の子供を連れていらっしゃるらしい。そんな噂を耳にしました」

マーシイは息を飲んだ。

アディスラーンも驚いたように、母親を凝視している。

「あなた達は、その方を探さなければなりません」

クリステイナは、まだ見ぬ自分たちの仲間の存在を示唆している。それはマーシイにも解った。それでも、

「セテイを助ける方が先だわ！」

考えるまでもなく、マーシイが立ち上がり、叫んだ。

「あの人は言っていた。セテイを助けたければ、自分の元に来いと」  
そんなマーシイの傍らに立ったのは、アディスラーン。

そう。自分達が先ず何をすべきなのか、それはクリステイナの話聞く前から、決まっていたのだから。

「どうしても？」

クリステイナの言葉に、マーシイは力強く頷く。

「ラーンは、剣を取り戻すことを優先させて。あたしは、セティを助けるわ。ひとりで二つのものを同時に手に入れるのは無理だけど。二人なら、きつとなんとかなる」

マーシイが、きつぱりと告げる。

「どちらも、私たちには絶対に必要なものだ」

アデイスラーンが、それに答える。

「ここから始める」

二人の声が重なった。

ここから、始めるのだ。いつか世界を救う為に。

逃げるばかりの旅だった。でも、運命からは逃げる事は許されな  
い。

「いいかげんにしろ」

抑揚のない声が、二人に水を差す。

「思い知った筈だ。自分達の無力さを」

ネイルの言葉は、しかしいつものようにマーシイを押さえつける  
ことは出来なかった。

「二度とは繰り返さないわ」

マーシイが言うのと、

「手の内は、解っている」

アデイスラーンも頷く。

「お前らに、何が出来る」

二人に圧倒されるように、ネイルが小さく呻いた。

「光の魔道師もラ・ナ・レーンの巫女も。精霊王さえもミゲルの軍  
勢を退けることが出来なかった。今のお前たちに、何が出来るとい  
うのだ？」

「やって見なければ、解らないわ」

「始めなければ、何も変わらない」

マーシィとアディスラーンが同時に告げる。同時に告げたので、互いに相手が何を言ったのかは正確には解らなかった。

「僕も、行く」

傍らから聞こえた声にマーシィは驚いてそちらを見る。いつの間にか、ユートとフアランシアも目を覚まし、真摯な顔でマーシィたちを見つめていた。

「ここから始めるのなら、きっと僕らの力も役に立つ。役にたつてみせるよ」

「そうですね。みんなで行きましょう。セテイを助けに」

こんな時なのにフアランシアの口調は、ちよつとそこまで散歩に行くようなもので、マーシィは何故かほつとした。その小さな頭を抱きしめる。

でも、さすがにこの小さな子供たちを連れていくわけにはいかない。

マーシィがそう思っていると、

「いいかげんに、しろ」

ネイルが苛立たしげに告げた。

「お前らを今日まで守って来たのは、ラ・ナ・レーンではない」

そんなことは、マーシィにも解っている。

でも、セテイを見捨てる事だけは絶対に出来ない。してはならない。

「俺は約束した。お前らを守り、導くと。それは、お前らが世界を救う運命の勇者だからではない。子供だからだ。ひとりでは何も出来ない、子供だからだ」

「ひとりじゃないよ」

いつの間にかネイルの元に歩み寄っていたのは、ユート。

少年の琥珀の瞳が、東の方角を見据える。

「僕には見える。いつか巡り会う、星のきらめき。集い合って、やがて大きな力になる」

「ユート？」

少年のいつにない様子に、マーシイは不安に思い、彼を見る。だから、マーシイは見なかった。いつも感情を表に出さないネイルが、驚愕の表情を浮かべた事を。

「なるほど。同じ世界に生きていても、見えるものは違う、か」

ネイルの声に、マーシイが再び彼女たちの後見人を振り返る。

ネイルは、笑っていた。

それは、ずっと彼と共にいたマーシイが、見たこともない表情だった。だが、マーシイは知っている。その笑みの意味する事を。

そう。ネイルはその時、挑戦者の目をしていった。

だから。

「教えて、ネイル」

青年の側まで歩み寄り、正面から彼を見据える。

ネイルが戦おうとしている事に、気づいたから。

「今までのように、私たちに道を示して。そして、セティを助けて」  
ネイルは、そんなマーシイ視線を真っ向から受け止めてくれた。

「お前の父親ならば」

と、ネイルは全然関係のない事を口に出す。

「マイヤならば、こう言っただろう。『勝たなくていい。大切な事は負けない事だ』と」

マーシイが小さく頷く。

負けない事とは、必ず生きて戻る事。

生きて戻れた事に、誇りを持つこと。

父は、そんな戦士だった。

「だが、お前は」

ネイルの黒い瞳が、アディスラーン、ファランシア、ユートを伺い、再びマーシイの元に戻った。

「戦うならば、必ず勝たなければならない。その覚悟はあるのか？」

「それはもちろ……」

勿論、ある。

そう言いかけたマーシイの肩を、誰かが引き寄せせる。

「簡単に答えていい事じゃないよ、マーシイ」

振り返ったマーシイの目に映ったのは、自分を見つめるアディスラーンの藍色の目。

「簡単に答えられるなら、何も考えていないだけだ」

そういえば、さつきもアディスラーンに同じような事を言われたな。

もっと酷い言葉だったけど。

そんな事を考える。

「セテイを助けることは、戦う事なの？」

それに対する返答は、どこからもなかった。

「全員、今のうちに仮眠を取っておけ」

と、ネイルがそれ以上の会話をうち切る。

「どちらにしても、今晚中にこの屋敷を出る」

ネイルの決断は、マーシイには未だ計り知れなかった。

## 第二章 レジスタンス1（後書き）

第二章の幕開けと同時に思い知った事。

「でー、この先まっしろやんか！」

はい。

本当にここから先はエピソードしか出来ていません。  
でも、ライフワークなのでがんばります。

## 第二章 レジスタンス2

長い夜になりそうだ。

窓の外に広がる真闇を睨みながら、ネイルはそんなことを考えていた。

マーシイを筆頭とする子供達ガキどもには「早く休め」と言っておいたが、眠れない自覚がある。心がざわついているから。

彼の手には、黒い石が握られていた。かつて、ネイルが「弟」と呼んだ青年から託されたもの。

追憶が、今でも後悔している画像を伴って繰り返される。

（俺は、行かない）

茶金色の髪 of 青年が、そう告げる。

この、惨劇の村に残るつもりだと、はっきりと言われなくても解っていた。

ネイルの、血の繋がっていない「弟」には、生まれた時から背負っている運命があったから。

それでもネイルは、正論を告げた。

（お前が残って、それで何になる？）

今更、お前に何が出来る？

弟 リヒトは、苦笑した。

（らしくないな。立ち上がる力があれば、立ち上がれ。前に進む勇氣があれば、前に進めって教え諭したのは誰だったっけ？）

（あれは、自分と向き合えという意味だ）

リヒトには、背負わなければならぬ運命がある。だが、それは命を投げ打って良い程のものだろうか。

あの化け物の眠りを守る。それが、祭祀である彼の役割であり、遠い祖先から押しつけられた彼の運命だった。

だが、その眠りが醒めた今、彼に出来る事は多くはない。

（解っているだろうが、見つければ確実に死ぬんだぞ）

化け物は、今まで自分の自由を奪っていた祭祀の血族を恨んでいる。

奴の怒りは、真つ先にこの義弟に向けられる筈だ。

勿論解っている、彼は笑った。

(ネイル 兄貴にばかり厄介ごとを押しつけて、悪いとは思っているよ。それでも、兄貴にしか頼めない)

彼は、別れる前に確かに笑っていた。

リヒト。

隣村から引き取られて来た、義理の弟。一見軟弱者に見えるが、一度自分で決めた事だけは決して譲らない性格だった。そんな所が面白くて、本当の兄弟以上に仲良くしていたような気がする。

彼の 代々祭祀の一族に架せられた使命を知ったのは、リヒトが引き取られた数年後だ。

怪物が目覚め、新たな「祭祀」がどうしても必要となった時。幼い少年だったリヒトは、見事にその勤めを果たした。

そしてその時から、リヒトは村を離れる事は許されなくなった。

怪物の眠りを守る為に。

それでも、怪物は目覚めた。

その怪物を再び眠りにつかせたのは、偶然その場に居合わせた、若い魔道師だった。名を、カル・フランスと言う。

この石は、元々その魔道師に託された物だった。彼が受ける取る事を拒んだので、仕方なくリヒトが預かっていたのだ。力を発動した魔石に触れる事が出来るのが、彼だけだったので。

いつか、彼が受け取る気になる時まで、弟はそれを預かっている筈だった。

(この石から、光が消えた。多分、カル・フランスは死んだのだと思っ)

この村に残ると言った弟は、その石をネイルに差し出した。

(まだ、誰にも言っていないんだけど。息子の……ユートの側に、いつも金色の蝶がいるんだ)

(しかも、これが俺にしか見えならしい)

どういう事だと聞くと、リヒトは「難しい事を考えるのは、兄貴の役目だろう」と笑った。

(何にしても、俺以上の宿命を背負っている事は確かなんだ。それを見越した上で、兄貴に頼みたい)

そう言っつて、リヒトはまだ眠っている子供と黒く変色した石を彼に差し出した。

(いつか、その時が来れば。これをユートに)

(その時?)

(来なければいいと、心から思っているよ)

追憶の中で、いつもリヒトは笑っていた。

運命を受け入れた者の悲壮感を、絶対に伺わせない晴れやかな笑み。

どうしてお前は笑えるんだと、何度も何度も自答をした。

子供を捨て、救える筈もない村の犠牲になって。

ただの無駄死にだと思わないのか、と。

金色の蝶が見えるようになったのは、そんな時だった。今では、

金色の毛並みを持つ栗鼠の姿をして、ユートの側にいる。

運命に殉じた義弟。

それでもなお、運命は彼の子に降りかかっているというのに。

勝手にしると、何度も言った。

勝手にすればいい。でも、俺を巻き込むな。

そう思っつたびに、黒い瞳が告げる。

(お願い。見捨てないで)

そう。ネイルはその瞳の持ち主と、約束をしたのだ。

彼女が約束を守る限り、子供達を守ると。

「ラ・ナ・レーンよ」

黒髪の男は、そつと呟いた。

「俺があんたに祈るのは、最初で最後だ」

両手を組み合わせ、東の空に祈る。

光を。

どうか、子供達ガキどもの上に。

はるかな東の空は、未だ闇に包まれていた。

ネイルは、どちらにせよ今夜はゆっくり休めと言った。

どちらにせよって、どういう事よと、マーシィはベッドに荒々しく腰をかける。

休めるわけがない。

森が、さわさわと風にざわめく。

まるで、世界の中に一人だけ取り残されたように、静かな夜。

既に寝息を立てているファランシアを起こさないように、マーシィは静かに部屋を出た。

夜風に当たっていると、少し気分が落ち着いてきた。先刻のネイルの言葉が思い出される。

(お前の父親なら、こう言うだろう)

(大切なものは勝つことではない、負けない事だと)

(だが、お前らは戦うならば必ず、勝たなければならない)

(その覚悟が、お前にはあるのか?)

そんなもの、最初からある。

そう言おうと思っていた。

簡単に答えて良いことではないとアディスラーンが言わなければ、絶対にそう答えていた筈だ。

必ず勝つ、覚悟。

よくよく頭を冷やせば、マーシィにも解る。

戦う覚悟なら、とうの昔に出来ていた。だが、それは必ず勝つ覚悟とは違う。

必ず、勝つ。

それはきつと、何を犠牲にしても勝つという事。

そんな覚悟。あるわけがない。それ以前に、マーシィには認める

事が出来ない。

誰も犠牲にしない為に、強くなる。

マーシイは、そう誓ったのだから。

「マーシイ？」

声をかけられ、振り返るとアディススラオンが立っていた。

「どうしたの？ こんな時間に」

自分の事は棚に上げ、尋ねる。

「ネイルに呼ばれて……この街の事や首都の事とか、聞かれていた  
だけだよ」

別に、仲間外れにしたわけではない。

そう言われたような気がした。

ネイルへの秘めた思いを知られて、変に気を遣わせたようだ。

「気にしないで」と、マーシイが小さく呟く。どうせ、片思いだ  
からと続く言葉は決して紡がれる事はなかったが。

代わりに、マーシイがさっきまで考えていた事を口に出す。

「スラオンには、あるの？」

その意味を計りかねたのだろう。え？ と、アディススラオンが聞  
き返す。

「必ず勝つ覚悟、あるの？」

アディススラオンは少し困ったように首をかしげた。

「持たなければならないと、思っているよ。でも、私では器量不足  
だな」

アディススラオンにないものが、自分に備わってなくて当たり前か  
もしれない。そう思って安堵する自分に、マーシイはちょっと嫌に  
なる。

最近、なにかとアディススラオンと自分を比べてしまいがちだ。

かなうわけがないのに。

小さく、嘆息する。

「そんな覚悟を持てる人、居るのかしら」

「居たら、どうする？」

マーシイの質問に、少年は質問で返して来た。

だからマーシイは小さく眉を上げ、更に質問を投げかける。

「ラーンは？」

「私は、自分の役目を果たすよ。その人が私を必要とするなら、私はその人を支える」

卑怯だろうか？ と、アデイスラーンが笑いながら付け加える。マーシイは小さく首を振った。

アデイスラーンの言うことは、正しい。

誰かが、いつかは立ち上がらなければならない。だが、マーシイには無理だ。

「守りたいものを犠牲にしても、勝つことなんか、あたしには考えられない。だから私はその人を受け入れられない」

「君は、そう言うと思っていた」

小さく、息をついたアデイスラーン。

雲が月を隠し、周囲を闇に染めた。だからその表情は、マーシイには見えない。

「今は、明日の事を考えよう。何もかも、それからだろうか？」

言われて、マーシイも小さく頷く。

未来なんか、まだまだ見えない。

だからこそ。決して失ってはならないものが、マーシイにはあるのだ。

セテイが目を覚ますと、そこは薄暗い部屋だった。

身動きすると体が痛む。だが、彼の傷ついた体はちゃんと治療が

施されていた。

「動くな、傷が開くぞ」

そう告げたのは、女の声だった。

「お前、何だ？」

蝋燭の灯りに映し出されたのは、異形の仮面。その仮面を、女は

セテイの前で初めて、外した。

長い髪の毛、女だった。

蠟燭の炎の加減か、その目は炎の色をしている。

「人間よ。お前と同じ」

「何故、俺を助けたんだ？」

セテイが想像した通り、その問いに答える返事はなかった。

「お前、ラーンの何なんだ？」

女は、やはり答えなかった。彼女が口にしたのは、別の言葉。

「お前を此処に連れて来たのは、あの子達を呼び寄せる為だ」

「何だと？」

立ち上がるうとして、痛みを顔をしかめる。

「あの子には見届ける権利があるから」

「見届ける？」

女はただ、じつと暖炉の炎を見つめている。

「私には、おまえたちは不憫でならない」

「ああ、神に選ばれた勇者に対して、失礼だったか」そう続け、

乾いた声で笑う。

「かつて、暁の剣士と呼ばれる賞金稼ぎがいた」

その言葉に、セテイの表情が強ばる。

「賞金稼ぎなら賞金稼ぎらしく、仕事だけを請け負っておけば良い

ものを」

パチパチとはぜる、薪。その薪を女はじつと見つめていた。

「子供達の未来に、憂いを残さないために戦い、散った」

「知って、いるのか？ その二人を」

女は、頑としてセテイの質問には答えない。

わざとそうしているように、セテイは思った。

「世界中の戦士が、神職者が、魔道師が、持てる力を出し切った。

それでも勝てなかった。当然だろう？ 相手は神だ」

「それでも、戦わなければならなかったら、俺は戦う」

セテイの言葉に、女はゆっくりと彼に視線を移す。

そして、小さく笑った。

「だから、不憫なんだ」

ゆっくりと、吐き捨てる。

「あんたも、戦ったのか？ 父さんたちと」

どちらにも取れる台詞を、セティは告げた。

意図しての事ではない、結果的にそうなってしまったただけだ。振り返った女の顔に、戸惑いを見て取る。

「肩を並べて、というわけではない」

そして女も、どちらとも取れる言葉を告げる。

「お前、名は？」

「セト・ナティ。賞金稼ぎのシェイとミアナの息子だ」

女は、驚かなかった。

「どちらかと言えば、母親似だな」

「やっぱり、父さんたちを知っているんだな？」

もう一度、セティが問う。

「物怖じしない所、ふてぶてしい所は、母親そっくりだ」

どこか楽しげにセティを伺う、女の瞳。

その時だ。

『先生』

虚ろな声が、闇の中に響いた。

『ラ・ナ・レーンの子に力を貸すのは、契約違反ですよ』

「貸してないだろう？ 全く」

小さく舌打ちをして、女はその闇に目を向ける。

『ええ。ただの警告です』

「相変わらず、かわいげがない」

『知っていますよ。嫌われている事ぐらい』

「不憫だな。お前達は、本当に」

「お前達」と言いながら、女はセティに視線を向けていた。

これは、どういう事なのだろうと、セティが考える間に。

「そろそろ、休んでおけ。明日は早い」

女が、そう告げる。  
セティは急速な眠りに陥った。

「星が、近づいて来る」

盲目の少女が告げた。

「どんな星だい？」

そう返すのは、青年。左手の甲に月桂樹の葉の痣を持つ。

それは、ラ・ナ・レーンに選ばれた『賢者』を示すあかし。

「大きな赤い星は、災いの星。一番輝いている白い星は、迷っている。青い双子星は、ルカーに力を貸してくれる。そして……」

いきなり、少女が目頭を押さえた。

輝きを失った目から、涙がこぼれる。

「まだ、輝き方を知らない星は、シユマにひかりをくれる」

「そうか」

と、青年は少女を抱きしめる。

「だったら、探さないといけないな。その星たちを」

少女は頷き、その盲目の目を虚無の空に向ける。

ひかりあふれる世界。そこは怖い物がいっぱいある。だが、賢者様の腕に包まれていると、そんなことは嘘のようだ。

それでも ルカーには、これからも苦難が待ち受けている。

シユマにはそれが見えていた。

でも、それを口にすることは出来ない。

なぜなら、シユマは「予言者」だから。

「その人たちはルカーの為にならないかも知れない」

それでも、と、シユマは告げる。

「シユマは、その人たちに会いたい。会いたい」

クリスティナがマーシィたちを起こしたのは、夜明け前の事だった。

暗い食堂には、既にネイルが居る。  
遅れて、アディススローンも到着した。

「今から、三人には領主の館に行ってもらおう」  
ネイルが手短かに告げる。

「俺は、ここで待機する」

「精霊の結界は破られた。ここが安全な場所とは言い切れない」  
告げたのは、その館のありかたを一番知る、少年。

「それでも」

と告げるネイルの視線の先には、目をこすっているファランシアの姿がある。

「連れて行くわけには、行かないだろう？」

ネイルの言葉にマーシイは頷き、ファランシアが反発した。

「わたくしだって、マーシイたちの力になる事ぐらいできますわ」

「此処に居ればな」

と、ネイルが告げる。

「ついて行けば、足手まといになる」

ファランシアが、ネイルを睨み付ける。

「大丈夫だよ」

そう言って笑ったのは、ユート。小さな栗鼠を、ファランシアの手に乗せる。

「アメリカが、僕たちを繋いでくれる」

琥珀色の瞳が、ネイルを見た。

「僕は、行くよ。駄目だって言われても、絶対に行く」

「わたくしだって……！」

「ユート」

少女の言葉を、ネイルが静かな声で遮った。

「何が見える？」

「一本の木を基にする、木の葉。それは空に上って星になって……」

「集って、力になる？」

「うん。そうだよ」

ネイルは、視線を精霊王の子孫である少年に移した。

「アデイスラーン様」

「精霊王は我らの味方か？」

「勿論」

「フアラシシア」

いきなり名を呼ばれ、巫女である少女が慌てて顔を上げる。

「はい」

「ラ・ナ・レーンは、どこにいる？」

「いつも、わたくしたちの傍らに」

「結構だ」

ネイルは、笑った。

マーシイにとっては、本当に久し振りに見た、ネイルの笑顔。

それは、挑戦者の不適な笑みに見えた。

「では、祈れ。今は、神の奇跡がいくつあっても足りないからな」

「ユート。これを渡しておく」

そう言ってネイルが取り出したのは、握り拳大の石だった。

「リヒト……お前の父親が持っていたものだ。本来の持ち主は別の男だったのだが。使い方は、お前の使い魔の方がよく知っているだろう」

ユートがその石を手に取るとほのかに輝き始める。ネイルはそれを見て、満足そうに笑った。

何か、変だとマーシイは思う。

「ネイル！ 何もこんな時に……」

「こんな時だから、渡しておくんだ」

ネイルがにやりと笑う。

「時間が過ぎる。お前達はすぐに発て。今日は、王の月、聖女の巡の最後の日。魔物が最も力をつける日だ。そして、明日は勇者の日。魔物の力が最も衰退する日。この時を逃せば、勝利はないと思え」

「作戦は？」

「相手がどう動くかも解らないのに、立てようがない」

その行き当たりばったりさに、マーシイが目を見開く。

こんな事は、今までにはなかった。

「連絡は、アディススローン殿に任せる」

「マーシイ」

名を呼ばれたのは本当に久し振りだったので、反応が遅れた。

「何？」

「やりたいことを、やってみる」

今までに、見たことがないような、ネイルの晴れやかな顔。

どうして、と、聞いてみる。

「見届けてやると、言っている」

アディススローンが頷き、外套を手に取る。

マーシイも仕方なく、それに習った。

外に出ると、クリステイナが馬を用意していた。

残念ながら馬は三頭しかないので、ユートはクリステイナと同

乗という事になる。

「ネイル」

先刻からずっと感じている不安の行き場を求めて、マーシイは青

年を振り返った。

「約束したって、言ったよね。あたし達を守るって。ネイルにそん

な約束をさせたのって、ミアナ？ それともエリユーゼイア？」

「そんなことを言っている場合ではない筈だ」

「やっぱり、母<sup>アイシニア</sup>さんのね」

その問いにはマーシイが思った通り、答える言葉はなかった。

## 第二章 レジスタンス2（後書き）

いきなり、オムニバス状態です。

でも、これを書いておかないとどうしても進めませんでした。

つまり何が言いたいのかって？

まだまだ、まだまだ、先は長いと……。

自分的には、これを書くまでは1/6ぐらいは書いたつもりでした  
のですが。

これからどうなるのでしょうか。

どうか、末永くおつき合ってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9245f/>

---

緑のレジスタンス

2010年10月12日00時32分発行